

校歌のルーツを訪ねて

久留米大学附設高等学校同窓会
東京支部総会 2020 年度幹事長
丸山 剛弘 (37 回生)

目次

はじめに.....	3
校歌について何も知らなかった 37 回生	3
まずは作曲者「藪文人」をネットで調べる	3
1 回生隈正之輔先輩に校歌誕生時のお話を聞く	5
今の校歌は耳コピで復元。原譜はどこに？	6
幻の 4 拍子の校歌が存在した！	7
藪文人先生の足跡を訪ねて明善高校へ	9
「久留米市史」に残る藪文人先生の活発な音楽活動	10
藪文人先生の明善高校時代の教え子 田村徹先生.....	12
藪文人先生のご長男、博之氏にたどり着いたが.....	13
遂に藪文人先生・藪博之先生のご遺族にたどり着く	15
藪文人先生の急逝 名曲「筑後川」と共に逝く	17
合唱名曲「筑後川」と附設の深い縁.....	20
灰塵に帰した校歌原譜と残された一枚の写真.....	21
藪淑子先生が 10 月同窓会に来ていただけることに.....	22
藪文人先生の生家 妙福寺（篠栗）	24
校歌楽譜の感想と藪博之さんのこと（藪淑子先生より）	27
藪文人先生の思い出（久留米高女 50 回生 野尻絹乃さん）	30
初代校歌作曲者 滝田卯夫先生を訪ねて.....	31
柳河高等女学校音楽教諭 滝田卯夫先生.....	33
蒲池中学校校長・本園清高先生からのお返事（滝田卯夫先生について）	36
中村八大氏の自伝にみる藪文人先生の思い出.....	37
作詞者 大石亀次郎先生	37
大石先生亀次郎先生が歌詞に込めた想い.....	41
町田健校長先生・合唱部顧問兼行孝幸先生へのお願い.....	41
田村徹先生による校歌の補作	42
恩師の皆様へのヒアリングと西原和美先生からのご返信	44
藪文人先生と、若き日の古田哲先生の接点	46
大石亀次郎先生のご子息・お孫さんとの会話.....	49
70 年振りに甦った初代校歌と混声三部合唱校歌の初演	51
大石亀次郎先生との邂逅	56
蘇った校歌二曲のご感想（藪淑子先生より）	60
おわりに.....	62

<参考文献等>	62
<ご協力いただいた方（順不同）>	64
<筆者略歴>	65

はじめに

久留米大学附設高校同窓会の東京支部は、毎年10月に同窓会を開催しており、50歳を迎える学年が幹事を務める慣例となっている。2020年10月の同窓会は37回生が幹事であり、縁あって私が幹事長を拝命することとなった。

2020年1月下旬の土曜日、37回生幹事団メンバー十数人が東京大手町の某所会議室に集い、10月同窓会のテーマについて、論議を行った。「東京五輪」や「男く祭」など、様々なキーワードが飛び交ったが、幹事団メンバーの胸に共通して響いたのは、「70周年」と「校歌」の2つのキーワードであった。

そう、2020年は附設高校創立70周年に当たる。同窓会では、80歳代の1回生から、高校を卒業したばかりの18歳の大学生まで、全員がお馴染みのあの3拍子の校歌を一緒になって歌う。歌い継がれてきた校歌のルーツを掘り下げれば、世代を超えて、学校や校歌への理解を深め、附設の古希を同窓生全員でお祝いできるのではないか。我々はそのように考えた。

ここから、我々37回生の校歌のルーツを巡る旅が始まった。

校歌について何も知らなかった37回生

しかし、改めて校歌について考えてみると、私たちは何も知らないことに気づいた。幹事長の私も、「校歌にしては珍しい3拍子」くらいの認識で、文語調の歌詞の意味を実はよくわかっていなかった。「千歳川」にいたっては、「なぜ北海道の川が歌詞に出てくるのだろう？」と、同期の松本義久君に「『千歳川』は筑後川の旧名」と教えてもらうまで、50歳近くになる今日まで疑問に思っていた。よくよく考えれば、あの附設の立地で、筑後川以外の川の名が校歌に使われるわけがない。私は己の知識の浅さと想像力の欠如を恥じた。

松本君は他にも、「附設の校歌は珍しく学校名が歌詞に出てこない」「作詞の大石亀次郎先生は附設の漢文の先生で、100歳を超えるご長寿だった」など、私よりは遙かに校歌に関する知識が豊富だった。しかし、「そもそも校歌って、いつできたのかな？」「作曲の藪文人って誰？ふみと？ふみひと？どう読むんだ？」「なぜ3拍子なのだろう？」など、様々な疑問が出てくると、誰も答えは知らなかった。

よし、10月までにどこまでやれるかわからないけれど、校歌のルーツをたどってみよう。私の思いは固まり、早速行動に移した。

まずは作曲者「藪文人」をネットで調べる

作詞の大石亀次郎先生は、附設高校の元教師だから、おそらく学校史などを紐解いたり、上の代の先輩方や先生方にお話を伺う機会があると考え、まずはまったく情報がない作曲者の「藪文人」を調べてみることにした。

インターネットの検索エンジンで「藪文人」と入力して検索してみると、附設高校オフィシャルサイ

トの校歌のページがヒットする。さらに検索すると、八女高校、日吉小学校、山川小学校、阿志岐小学校（筑紫野市）などの校歌作曲者としてもお名前が出てくる。なるほど、附設だけでなく、様々な学校から校歌の作曲を依頼されるような音楽家だったのだな、と想像した。

山川小学校のホームページには同校校歌の音源も公開されていたので、試しに聞いてみたところ、驚いた。「このリズムは…3拍子だ！」

やはり、藪文人氏は3拍子が好きだったのか。ますます興味が高まり、検索を続けると、特に明善高校関連のサイトでたくさんの情報が表示され、元久留米高等女学校、戦後は同校と統合した明善高校の音楽教諭であったことがわかった。お顔の写真もいくつか掲載されており、いかにも音楽家といった風貌である。単なる「藪文人」という文字情報から、一気に一人の人間・音楽家「藪文人先生」としてのイメージが膨らんでいった。

昭和35年（1961）に発行された「明善新聞」には、ご年齢や趣味なども記載されており、さらに他のサイトでは、世界的ヒット曲「上を向いて歩こう」や、「笑点のテーマ」などで有名な作曲家・中村八大が明善高校時代の教え子であったことなどもわかってきた。これはすごい方だ、もっと調べないと。

私は、2月1日～2日の土日にかけて、久留米で開催される同窓会の会合に出席するため福岡に帰省する予定があったが、平日も現地で調査できるように、続く月曜・火曜も休暇を取り、福岡に飛んだ。

ネット検索でわかったこと（2020年1月31日時点）

- ・藪文人氏は久留米高等女学校（戦後は明善高校に統合）の先生。
- ・昭和35年7月1日時点で55歳。明治38年（1905）生と推定。
- ・担任クラスは音楽。受持学科は音楽部長。校友会は総務担当。
- ・趣味はバラづくりとドライブ。
- ・生徒からのコメント欄に、「先生の自家用車、とても素敵です」とある。



写真：昭和22(1947)年11月16日、福岡県南部中等学校合唱発表会。指導・藪文人先生の挨拶。
久留米高女講堂にて。

- ・藪文人氏は、作曲家の團伊玖磨氏と同じ東京音楽学校（現在の東京藝術大学）の出身。
- ・久留米大学や篠山小学校が、詩人の丸山豊氏作詞の「久留米大学歌」「篠山小学校歌」の作曲を團伊玖磨氏に依頼する際に、藪文人氏が仲介した。
- ・團伊玖磨氏作曲のオペラ「夕鶴」の「与ひょう」役は、藪文人氏の東京音楽学校時代の友人である木下保氏が歌った。
- ・『夕鶴』が初演された前年、「与ひょう」役の木下保は、明善高校教諭の藪文人から頼まれ「久留米市の歌」の作曲に團伊玖磨を紹介した。無名に近かった團に白羽の矢が立ったのは、東京音楽学校（現・東京藝術大学）時代の同級生木下と藪の二人の関係から生まれた。久留米市が委嘱する「市歌」の介在役に藪が当たり、全国公募された歌詞により「久留米市歌」は昭和 26 年（1951 年）に作曲された。（團伊玖磨生誕 85 周年記念 佐藤しのぶ久留米公演プログラムノートより引用）
- ・チャップリン髭の風変わりな人で、授業は週 2 時間のうち 1 時間はレコードコンサート、あと 1 時間は発声の基礎練習で終始した。中村八大さんは藪先生の教え子で、「彼は基本ができていたので今日がある」と言われたのを覚えている。演奏ツアー中の八大トリオが明善に立ち寄って校内演奏会があった。ピアノを弾く八大さんの笑顔と鮮やかな演奏、そして藪先生は得意満面だった。（明善高校卒業生のブログより引用）
- ・旧中学明善と旧久留米高等女学校が昭和 24 年併合して明善高等学校になり、軍国日本の勇ましい校歌に変わる新時代にふさわしい校歌の制定が望まれた。ようやく機運が実ったのが昭和 31 年、国語教師杉本寿恵男・音楽教師藪文人と生徒代表とで校歌委員会ができた。作詞は佐藤春夫に、作曲は信時潔という当代一流の大家に頼むことになった。（明善高校卒業生のブログより引用）

1 回生隈正之輔先輩に校歌誕生時のお話を聞く

2020 年 2 月 1 日（土）、私は東京支部同窓会幹事長として、久留米市櫛原のマリターレ創世で開催された会合に出席し、その晩に行われた久留米 O B 会で、1 回生の隈正之輔先輩に校歌誕生時のお話を伺う機会に恵まれた。隈先輩は、まるで昨日のことのよう、大石亀次郎先生を思い浮かべながら、詳しく当時の様子を話してくれた。隈先輩のお話は以下のとおりである。

「入学した時（昭和 25 年（1950）4 月）は、校歌はまだ無かった。校歌は私の在学中に作られた。朝鮮動乱の時だったなあ。作詞は亀チャン（大石亀次郎先生のこと。愛情を込めた言い方でした。）。公職追放とかレッドパージとか、大変な世の中だった。元々明善の教頭先生だった大石亀次郎先生が詞を作って、明善の先生に作曲を頼みに行った。この歌詞カードに書いてある藪文人さんかな？でも、我々も藪先生のことは良く知らない。それに、校歌といえば、校歌の楽譜の原本は紛失してしまったらしい。確か 20 回生位の代が、楽譜の復元にチャレンジしたことがあった気がする。」



隈正之輔先輩（1 回生・左）と筆者（37 回生・右）

そうか、開校した時にはまだ校歌は無かったのか。在学中ということは昭和 26 年頃かな？ 楽譜の原本が無くなった？ ピアノ無しでしばらく歌っていたのだろうか？ また、新たな疑問が湧いてきた。

よし、附設高校に行って調べてみよう。2 月 3 日（月）、私は母校の同窓会事務局を訪問した。朝 10 時過ぎに訪問する旨を事務局の中村昌子さんには事前に伝えてあった。西鉄久留米駅から附設高校行のバスに乗り、懐かしの附設高校の白いバス停が見えてきた。ただ、まだ午前 9 時ごろで時間があつたので、そのまま池ノ谷、野菜試験場前とバスに乗り続け、商学部前で下車した。テニスコート沿いに歩道を少し附設の方向に戻ると、世良忠彦先生の筆による「久留米大学附設高等学校揺籃之地」の石碑がある。旧御井校舎時代の正門のあたりである。昭和 26 年頃、大石亀次郎先生はここで作詞されたのだろうか。

そんな思いを馳せながら、高良山をバックに、野菜試験場の坂を下り、正源寺の丘にある附設高校に向かった。ちなみに、私が高校在学中の昭和 63 年（1988）頃、ウラ店（南郷商店）や弁天（お好み焼き屋）といった懐かしのお店があった辺りに寄り道したが、あれからもう 30 年以上が経ち、さすがにそれらの店はなくなっていた。

今の校歌は耳コピで復元。原譜はどこに？

2020 年 2 月 3 日（月）朝、附設高校同窓会事務局を訪問し、事務局の中村昌子さんに、「附設高等学校二十五年史」（以下「二十五年史」）、四十年史「仰慕帰心」、五十年史「和而不同」、草創期の生徒・職員文集「ふよう」（全 19 冊のうち、事務局に僅かに残っていた数冊のみ。）を見せてもらい、貪るように読んだ。

まず二十五年史をめくってみると、すぐ校歌の楽譜と、歌詞が掲載されているページが目に入った。お馴染みの 3 拍子の校歌である。しかし、左下をよく見ると、「おことわり」と書いてある。その内容を以下に記す。

「<おことわり>上掲校歌譜については原譜を失い、現在生徒達の歌っているものを採譜した為に、原作品を誤っているかもしれないことを謹んで原作者におわびしたい。」

なるほど、これが隈正之輔先輩がおっしゃっていた「楽譜紛失事件」か。二十五年史の発行は昭和 52 年（1977）で、開校から 27 年後だが、隈先輩がおっしゃっておられた「20 回生くらい」よりはだいぶ後の時期になる。そこで、他の資料を見ると、二十五年史の元となった手書きの復元楽譜を「ふよう」第 17 号（昭和 41 年（1966）11 月 20 日発行）で発見した。開校 17 年目、17 回生の代である。

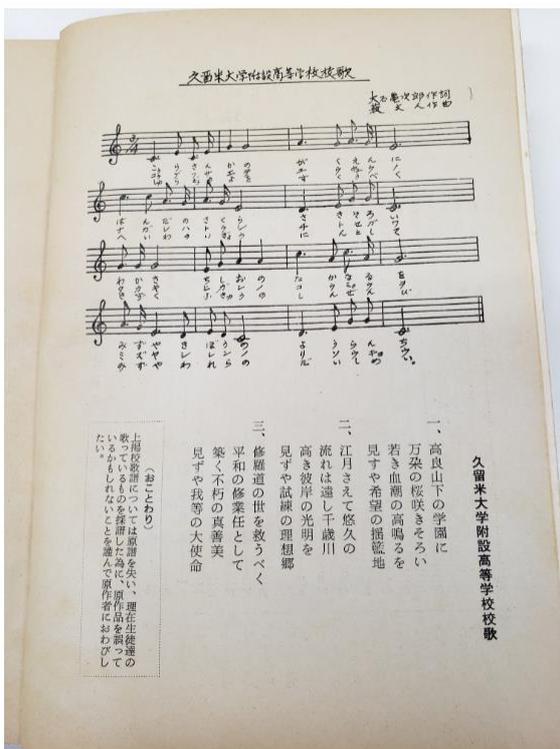
旧御井校舎から現在の校舎への移転の際に紛失したのではないかと推測したのだが、現在の附設高校の場所への移転は昭和 43 年（1968）7 月なので、どうやら旧御井校舎時代に既に紛失してしまっていたようである。しかも、当時の学校関係者の誰かが、耳コピで復元を図ったようだ。その後、手書きの楽譜は活字で清書されるが、4 分の 3 拍子を示す冒頭の記載が消えていたり、所々拍の長さがおかしいところがあり、おそらく、音楽にあまり明るくない先生または生徒が、復元に携わってきたのであろう。

二十五年史を読むと、268 ページに、田尻豊実先輩（1 回生）の寄稿文に、校歌が原曲とは変わってしまっていることをうかがわせるエピソードが書いてあった。その一文をご紹介します。

「昭和 51 年（1976）11 月 27 日、新宿レインボー・ホールで、原校長、西牟田会長、板垣先生のご遺族の石橋氏夫妻を招き、同窓生 220 余名の出席を得て、同窓会東京支部創立総会が開催された。

1 回生と 20 数回生で校歌の唱い方が違ったので、原校長先生御自ら校歌の再教育をされるというハプニングがあった。」

このエピソードからも、おそらく 1～5 回生くらいまでは、原曲に沿った歌い方をされていたのであろう。果たして、原作者の藪文人先生には、藪先生のご存命中におわびができたのであろうか。藪文人先生のご遺族が見つければ、もしかしたら原譜の作曲ノートが遺されているのではないだろうか。私はそのように考え、藪文人先生のご遺族を探すことを思い立った。



「ふよう」第 17 号（1966 年）に掲載されている手書きの復元楽譜。

左下に、原作者（藪文人氏）へのおわびが記載されている。

楽譜冒頭には、4 分の 3 拍子であることを示す「3/4」の記載がある。

幻の 4 拍子の校歌が存在した！

次に、校歌がいつ制定されたのかを明確にしておきたいと思い、四十年史「仰慕帰心」の年表を確認した。隈先輩の証言から、開校 2 年目あたりの昭和 26 年（1951）頃と想定していたので、年表を見たところ、すぐに発見することができた。

しかし、何かがおかしい。昭和 26 年度の項に記載はあるが、「6 月 22 日 校歌改定（曲を変更）」と書かれている。曲を変更？今の 3 拍子のあの曲ではなかったのか？ その楽譜はどこに？ 最初の曲が制定されたのはいつ？ また、疑問が山のように湧いてきた。

最初の校歌制定日は、「ふよう」第 15 号 6 ページに掲載されていた年表ですぐに判明した。「昭和 26 年 5 月 30 日 校歌制定、ピアノ購入」とある。つまり、最初の校歌は、開校 2 年目の昭和 26 年（1951）

5月30日に制定されたのだ。しかし、わずか23日後の6月22日に、藪文人先生の曲に変更されることになる。いったいこのわずか3週間の間は何があったのだろうか？ 最初の校歌の曲はどんな曲だったのか？

四十年史「仰慕帰心」を見たところ、最初の校歌に関する記載と楽譜の縮小版が記載されていた。その記載は以下のとおりである。

「昭和29年発行『久留米大学二十五年史』より（実際には歌われなかったようであるが、記録のために掲載した）」

歌詞は今の校歌と同じだが、4拍子である時点でまったく曲が異なっている。同窓会事務局の戸棚に『久留米大学二十五年史』（昭和29年（1954）発行）が置いてあったので、見てみたところ、256ページには歌詞付きの楽譜、257ページにはピアノ譜が掲載されていた。これはぜひ聴いてみたいが、私には楽器を弾いたり、初見の楽譜を歌える音楽の素養はない。同窓会事務局で楽譜のページをコピーさせてもらって東京に持ち帰り、後日、自宅で高校生の娘（吹奏楽部）に楽譜作成ソフトに打ち込んでもらい、パソコンで聴いてみることにした。

聴いてみると、新鮮な感動を覚えた。何だこれは。今の校歌と全然違う。

合唱好きの妻も興味を持ち、楽譜を見て娘と歌いだした。歌詞は「高良山下の学園に」で全く同じなのに、曲が違う。印象としては、男子校っぽくない、女性の声の方がマッチしているような、または混声合うような、穏やかな曲調である。

今の3拍子の校歌が躍動的な曲調であるのに比べると、この4拍子の初代校歌は、東京六大学野球の神宮球場の応援席で、各大学の卒業生が、直立不動で歌っているようなイメージである。もしくは、高校野球の球児が試合終了後に、勝利を囁みしめながら歌っているような感じか。

楽譜には「滝田卯夫作曲」との記載がある。果たして滝田卯夫とは誰なのか。幻の初代校歌のルーツを求めて、もう一つの新しい調査が始まった。



4 拍子の初代校歌の楽譜。作曲者名の箇所には、「滝田卯夫作曲」と書かれている。
 (昭和 29 年 (1954) 発行「久留米大学二十五年史」256 ページより抜粋)

藪文人先生の足跡を訪ねて明善高校へ

時を 2020 年 2 月 3 日 (月) の午前に戻す。附設高校同窓会事務局で数々の事実を知った私は、久留米滞在の貴重な時間を 1 分でも無駄にすまいと、楽しみにしていた久留米ラーメンや、想夫恋でのお昼ごはんを諦め、午後、明善高校へ向かった。

J R 久留米駅行きの西鉄バスに乗り、駅の少し手前のバス停で降りて北上すると、明善高校の正門が見えた。正門に入ってすぐ右側にある同窓会事務局を訪問し、事情を説明すると、事務室で「明善高校九十年史」(昭和 45 年 (1970) 発行) を貸していただくことができた。ここでもまた貪るように一気に読んだ。この本でわかったことは以下のとおりである。

- ・大石亀次郎先生は、旧制明善中に大正 10 年 (1921) 4 月 9 日に着任し、昭和 11 年 (1936) 3 月 31 日に退任された。
- ・藪文人先生は、昭和 5 年 (1930) 4 月 4 日に久留米高等女学校 (後に新制明善高校と統合) に着任された。(25 歳頃)

- ・藪文人先生は、久留米高女が旧校舎から新校舎に移転する際に、「旧校舎惜別の歌」を作曲。
- ・藪文人先生は、戦後、教育制度改革で六三三制となり、久留米高等女学校から新制福岡県立久留米高等学校となった昭和 23 年（1948）4 月には、校務委員として総務を担当していた。（43 歳頃）
- ・藪文人先生は、明善高校と久留米高校が統合した 5 月には、校務では渉外を担当した。
- ・藪文人先生は、昭和 45 年（1970）に発行された「明善高校九十年史」に、既に「死亡」と記載されている（60 代前半だったと推定される）
- ・大石亀次郎先生の明善高校在任は大正 10 年（1921）4 月 9 日から昭和 11 年（1936）3 月 31 日までだが、明善高校と久留米高等女学校（統合直前は新制久留米高校）の統合は昭和 23 年（1948）なので、在任期間中は直接同じ職場ではなかったものと思われる。大石亀次郎先生の方が藪文人先生より 17 歳くらい年上。

そうか、藪文人先生は、昭和 45 年（1970）頃には既にお亡くなりになっていたのか。これは足跡をたどるのは難しいかも、と思っていたところ、明善高校同窓会事務局の女性職員の方が、次のようなことを教えてくれた。

「明善高校の卒業生にも藪さんという男性がおり、昭和 27 年（1952）に卒業しています。藪文人先生の関係者かも知れません。何年か前にこの藪さんが亡くなったという誤報が同窓会事務局にあり、誤って訃報を出してしまったことがあるのです。藪さんの同期の卒業生の方が、明善同窓会事務局に誤報だと連絡をくれたので、誤りがわかりました。藪さんの今の住所はわかりません。誤報だと連絡をくれた方も今は不明です。亡くなられたのかも知れません。」

藪という姓は珍しく、そんなに多いとは思えないし、昭和 27 年（1952）卒業であれば、昭和 8～9 年（1933～1934）頃の生まれだから、藪文人先生のご子息でも年齢的におかしくない。ご存命であれば 85 歳くらいのはず。よし、何とかしてこの男性を探そう。

思いを新たに、この日は明善高校を後にし、福岡市の赤坂で夜に予定されていた 37 回生有志の同期会に出席するため、JR 久留米駅から鹿児島本線で博多に向かった。途中、大石亀次郎先生や藪文人先生が何度も眺めたであろう筑後川を渡り、ブリヂストンの工場群に別れを告げ、大石亀次郎先生がお住まいだった鳥栖、戦後町長を務められた田代を通過する際は夕方の 5 時になっていた。

「久留米市史」に残る藪文人先生の活発な音楽活動

さて、休暇も 2 日目となり、2020 年 2 月 4 日（火）は東京に戻る日である。夕方の飛行機まで時間があるので、スマホで藪文人先生とご子息、それに滝田卯夫氏の情報を調べようとしていたところ、校歌調査に興味を持った筆者の父が、「図書館でも行ってみるか」と誘ってくれ、車で筑紫野市立図書館まで連れていってくれた。

あまり期待せずに足を運んだのだが、郷土史資料のコーナーにあった「久留米市史」第三巻と第四巻で、「藪文人」の名前を数か所発見することができた。内容は以下のとおりである。

- ・藪文人氏は、昭和6年（1931）に、「久留米ピアノサークル」を結成した。
- ・藪文人氏は、昭和21年（1946）11月9日に結成された「久留米文化の会」の発起人に名を連ねていた。
- ・「久留米文化の会」は、昭和22年（1947）から23年（1948）にかけて、月例文化講座を開催するなど、戦後の混乱期の中で盛んに活発な活動を行ったが、経済的困窮から運営が行き詰まり、昭和24年（1949）9月に解散した。
- ・昭和24年（1949）11月、「久留米連合文化会」が新たに発足し、藪文人氏は、音楽部分の委員として名を連ねていた。「久留米文化の会」が会員会費で運営を行ったのに対し、「久留米連合文化会」は図書館活動と提携し、公的な性格を帯びていった。
- ・「久留米連合文化会」は昭和26年（1951）からは久留米市公民館に事務局を置き、昭和26年度に26回、27年度に71回、28年度に66回の行事を催した。
- ・昭和22年（1947）、藪文人氏は、森部静武氏らと「久留米音楽協会」（会長 本間一郎）を創設し、昭和23年（1948）に第1回の音楽会を開催した。
- ・昭和24年（1949）1月、旧久留米高等女学校の卒業生を中心にして結成していた小笹合唱団（女声合唱団）が解散し、「久留米音楽協会合唱団」が結成され、藪文人氏が初代指揮者に就任した。昭和27年（1952）から指揮者は本間四郎氏に代わり、名称も「久留米合唱協会」と改めた。

藪文人先生は、上記のとおり、昭和20年代前半（年齢は40代前半）に久留米でかなり積極的に音楽活動を行っていたことがわかった。「久留米文化の会」「久留米連合文化会」は、音楽だけでなく文学なども含めて幅広いジャンルで活動を行い、久留米大学の学生も参加していたので、大石亀次郎先生と藪文人先生の接点もそれなりにあったのではないかと推測した。

なお、後で知ったことだが、西日本新聞社「明善物語 風雪百年」（1980）によると、久留米音楽協会の本間一郎氏は明善高校OBであり、七男五女のうち、四男の四郎氏を含む10人が明善高校に進み、六男の一弘氏と七男の七郎氏が附設高校に進んでいる（一弘氏が1回生、七郎氏が4回生。）。

「附設高等学校二十五年史」によると、本間一郎氏は附設高校の初代後援会長を昭和25年度から29年度までの5年間務められている。また、附設10回生の古賀暉人先輩の奥様が、ご友人である本間四郎氏の奥様から聞いた話によると、附設の草創期は、大石亀次郎先生が毎晩のように本間家に立ち寄り、晩御飯をご一緒されておられたそうである。大石亀次郎先生と藪文人先生との接点や、校歌の曲変更は、もしかしたら、本間家の食卓での会話が起点になったのかも知れない。

なお、上述の「久留米市史」には、「昭和25年（1950）には『アリオンコール』が結成され、初代指揮者には古田哲が就任した。」との記述があった。附設高校で「パラピタ法」など、数学を教わったあの古田哲（ふるたあきら）先生と同姓同名である。これは気になる。

古田先生も、常に音楽を愛し、男く祭のコーラス大会の審査員を務めた他、作詞世良忠彦先生とのコンビで、久留米大学附設高等学校25周年祝歌『ふるさとに時はきらめく』、久留米大学附設高等学校寮歌『いのちのちえは』など、数々の曲を作曲しておられ、音楽に深い造詣があった。古田哲先生は平成30年（2018）4月に逝去されており、ご本人に確認することはもうできないが、おそらく同一人物では

ないかと思われ、こちらも調べてみることにした。

<参考>本間一郎氏の葬儀（昭和38年（1963）12月15日）における大石亀次郎先生による弔辞

昭和25年創立頃の附設高等学校は俸給も分割支給の貧乏所帯、今日は本屋をあさって古辞書、明日は古物商を廻って古本棚を購って帰る。

時には生徒と一緒に錆釘を拾っては石でコツコツ叩き伸ばして使いました。数百本の古釘。…

この頃第一回の附高父兄会長として、冬は古ストーブを寄贈して頂いたり、二学級で最初の学年、而かも信念と意気とに燃ゆる人材育成への応援を惜しまれなかった。

附設高校も十四才に生長して参りましたよ。

（出所）寿栄会（2006）『七代 一郎おじいちゃんってどんな人？幸江おばあちゃんってどんな人？』

藪文人先生の明善高校時代の教え子 田村徹先生

2020年2月4日（火）夕方、福岡空港でスマホを見ていると、10回生の古賀暉人先輩からメールをいただいていることに気が付いた。2月1日の久留米OB会で、1回生の隈正之輔先輩と一緒にテーブルにおられ、校歌のお話を伺った先輩である。

古賀暉人先輩によると、毎週水曜日に「久留米水曜会」という勉強会を開催しており、その会に参加しておられる元文教大学理事長で作曲家の田村徹先生（武蔵野音楽大学卒）が、明善高校時代に藪文人先生から直接音楽を習ったことがあるらしいので、電話でお話を伺ったらどうか、とのご提案だった。

文献や資料ではなく、生の藪文人先生を知る方のお話を伺えるまたとない機会である。田村徹先生のご経歴をすぐにスマホで確認したが、数々の作品、著書、受賞歴があり、多くの学校の校歌も作曲しておられる。仮に他で田村徹先生と藪文人先生の接点を知ったにしても、古賀暉人先輩のご紹介がなければ、電話で高校時代のことを聞くなくて、なかなかおそれ多くてできなかったであろう。これは非常にありがたい。

古賀暉人先輩にすぐさまお礼のメールを送り、翌日夕方、古賀暉人先輩の携帯に電話を差し上げ、定例の会合で隣におられた田村徹先生とお話をさせていただいた。そこで、藪文人先生とご子息について、以下のお話を伺うことができた。

「藪先生の下の名前の読み仮名は『ふみと』です。あだ名は特にありませんでした。気難しい、古風な、芸術肌の先生でした。もともと、久留米高等女学校の方で教えておられました。上野（東京音楽学校、今の東京藝大）で学んだヨーロッパの高尚な芸術文化を、地方に発信するぞという気概を感じました。そうした自負に溢れていたと思います。明治・大正期は、そうした地方での音楽教育を担う先生を急いで育成していた時期があり、藪先生はその最後の世代だと思います。」

「藪先生のご長男が、福岡県の県立高校（明善ではない）で音楽の先生をなさっていました。私の3歳くらい上だったので、ご存命であれば85歳くらいだと思います。藪先生は、明善で音楽の先生をやりながら、自宅でピアノの先生もしていました。藪先生のピアノの薫陶を受けて音楽家になった方は多いと思います。藪先生がいつ頃お亡くなりになったかはわかりません。明善高校を定年退

職したあと後も、しばらくはご健在だったのではないかと思います。ご長男の方を見つけて聞ければわかると思います。」

「藪文人先生が、附設高校の校歌をなぜ3拍子にしたのかはわかりかねます。校歌はマーチ（行進曲）形式が多いですが、同じ歌詞で、応援歌や行進曲用に、違うメロディを用意している校歌の例もあります。附設高校には合唱部があるそうだから、マーチの校歌も歌ったらどうでしょうか。」

「今日、古賀（暉人）さんに見せてもらった2つの楽譜のうち、後から作曲された方（藪文人先生作曲の校歌）は、3拍子や4拍子が混じっており、楽譜としては混乱が見られますね（注：原譜紛失後に、当時の先生または生徒が耳コピで作直した楽譜であって、藪文人先生が作成された原譜ではない）。校長先生や音楽の先生も交えて、ちゃんと楽譜を作り直した方が良いと思いますよ。お声かけいただければ、相談に乗ります。今度、久留米にお見えになることがあれば、喜んでご同席させていただきますよ。なお、最初に作曲された方の校歌ですが、滝田卯夫先生という作曲家は存じ上げません。」

なるほど、藪文人先生は芸術家肌の気難しい先生だったのか。ご長男の方もやはり明善高校出身で、福岡県の県立高校の先生ならば、県内で探せば見つかるかも知れない。藪文人先生の実像に、また一歩近づくことができた。次は何としてでもご長男を見つけ出そうと思い、ネットなどで調査を開始した。

ちなみに、古賀暉人先輩にも、附設在校時代の校歌についてお聞きしたいことがあり、田村徹先生とのお話が終わった後、在校時代のことについて質問をさせていただいた。古賀暉人先輩のご回答は以下のとおりであった。

「附設在学中、4拍子の校歌があったことは知りませんでした。昔は放課後の部活動が盛んではなく、禁じられていたので、ピアノでみんなで歌うようなことはありませんでした。そもそも歌うこと自体が少なかったのですが、旧制高校風の応援歌がいくつかあって、それらを伴奏無しで歌っていました。校歌を歌う機会もあまりありませんでしたが、歌うときは、伴奏無しで歌っていました。」

「田村徹先生がおっしゃるには、4拍子の滝田先生作曲の楽譜は、いかにもプロの音楽家が作曲したという感じで、音楽としての完成度は高いとのこと。ただ、歌いやすいかどうかは別の話なので、歌いやすい3拍子の方に変えたのではないかとおっしゃっておられます。田村先生とは、毎週水曜日に勉強会をしているので、何かあれば連絡をください。」

古賀暉人先輩は10回生である。この頃には既に楽譜は紛失していて、校歌はアカペラでの伝承になり、毎年曲調が少しずつ変わり続けていたのかもしれない。

藪文人先生のご長男、博之氏にたどり着いたが…

2020年2月8日（土）の午前中、インターネットで藪文人先生のご長男らしい方の情報を探していると、いくつかそれらしい方が掲載されているサイトにたどりついた。まず、明善高校管弦楽部の歴史を紹介するホームページをみると、以下の記載があった。

「明善オーケストラの第1回定期演奏会は昭和47年(1972)に遡りますが、これ以前に二度、OBとともに合同演奏会が開かれました。その記念すべき第1回演奏会では、藪博之氏とともに本校先輩の本間四郎氏が指揮を執り、また当時『上を向いて歩こう』『こんにちは赤ちゃん』『遠くへ行きたい』など多数の作品で一世を風靡した同じく本校先輩の中村八大氏が、多忙の傍ら急遽久留米へ帰郷しピアノ伴奏をつとめました。」

「藪博之氏」とあるが、明善高校管弦楽部のホームページに中村八大氏らと一緒に紹介されているので、おそらく明善高校の卒業生に違いない。明善高校同窓会事務局の方の説明や、田村徹先生のご説明とも合致する。昭和27年(1952)3月に高校を卒業しているはずなので、昭和26年(1951)6月の附設校歌作曲時は高校3年生のはず。そうであれば、藪文人先生が音楽教師だったときに親子で明善高校に在学していたことになる。

後日、これらの推測は正しかったことが判明するが、それは後述するとして、他のホームページでも、例えば「吹奏楽部コンクールデータベース」というサイトで、指揮者「藪博之」で検索し、筑紫丘高校や福岡高校で音楽教師をされていたことがわかった。これはもう藪文人先生のご子息に間違いない。

午後、私は、さらなる情報収集のために、永田町の国会図書館に向かい、藪博之の他、大石亀次郎先生や滝田卯夫氏に関する情報をリサーチした。すると、古い人名録などから、いくつか藪博之氏に関する情報を得ることができた。人名録に記載のあった電話番号に電話をかけてみたが、現在は使われていなかった。転居されたのだろうか。なお、国会図書館で新たに得た藪博之氏の情報は以下のとおりである。

■日本の音楽人名鑑(ピアノ篇)音楽の友社(昭和59年(1984)10月30日発行)

- ・昭和9年(1934)1月6日生まれ。久留米市出身。
- ・昭和32年(1957)武蔵野音楽大学ピアノ科卒業。
- ・福井直俊、末永博子に師事。
- ・熊本音楽短期大学客員教授、武蔵野音大同窓会福岡支部長。

■音楽家人名辞典(新訂第3版)日外アソシエーツ

- ・第一保育短大教授

2020年2月10日(月)、音楽家人名辞典に「第一保育短大教授」との情報があったので、福岡こども短期大学(旧:第一保育短期大学)の事務局に、電話で問い合わせをした。すると、10年くらい前(2010年頃?)に、ご病気をなされ、退職されたとのことだった。現在の消息はわからないが、事務局の問い合わせに出られた女性が、偶々、藪博之先生の遠い親戚とのことで、粕屋郡のお寺に藪家の一族が住んでいると教えてくれた。

明善高校同窓会事務局に電話し、藪博之氏の卒業年度を伺ったところ、昭和27年(1952)3月であることが確認できた。年齢もぴったりでもう間違いないだろう。

次は、福岡高校同窓会事務局に問い合わせを試みた。過去に音楽教師として勤務していたことは確

認できたが、現住所はわからないとのことであった。

ならばと、次は武蔵野音楽大学同窓会事務局に問い合わせしたところ、遂に、藪博之氏の消息を知ることができた。しかし、残念ながら、藪博之氏は、平成 31 年（2019）1 月 13 日に亡くなられたとのことであった。わずか 1 年前である。

藪文人先生をよく知る遺族の方、校歌の原譜を持っておられそうな方にあと少しでたどり着けそうだったが、やはり 70 年の時間の壁は大きかったか…。

遂に藪文人先生・藪博之先生のご遺族にたどり着く

そう思ったときに、武蔵野音楽大学同窓会事務局の方から、現在、武蔵野音楽大学同窓会福岡支部長を務めておられる本間敬二（ほんまけいじ）先生であれば、藪博之氏のご遺族の連絡先をご存知かも知れないとお話をいただいた。そこで早速、本間敬二先生のご自宅に電話してみたが、留守だったので、留守電に後日改めて連絡する旨のメッセージを入れた。

すると、ほどなくして、武蔵野音楽大学同窓会事務局の女性から、「藪博之先生の訃報を連絡してくれた直属の門下生の方がおられます。この方ならば、藪博之先生のご遺族の方をご存知である可能性が高いと思います。」との連絡があり、北九州にお住いの赤木泉先生（男性）のご連絡先を伺うことができた。そこで早速、赤木先生に電話をし、事情をご説明したところ、以下のご回答をいただくことができた。

「私は昭和 24 年（1949）に生まれ、昭和 33 年（1958）、小学生のときに、藪博之先生にピアノを習い始めました。その後、昭和 43 年（1968）に武蔵野音楽大学に入学しました。藪文人先生は存じ上げませんが、昭和 40 年代に亡くなったと聞いた記憶があります。学生の頃、筑紫丘高校の体育館で、藪博之先生が指揮をなさっていたブラスバンドの演奏を聞いたことがあります。藪博之先生の奥様である藪淑子（やぶとしこ）先生が、今は広島で一人暮らしをされています。藪博之先生や文人先生のごことは、藪淑子先生に直接聞いていただければと思います。」

遂に、藪文人先生と藪博之先生を知るご遺族の方にたどり着いた。附設高校の校歌のルーツである。

2020 年 2 月 10 日、時計は 19 時を回っていた。ご高齢の一人暮らしの女性に電話をかけて良い時間かどうか少し悩んだが、それほど遅い時間ではないと自分に言い聞かせ、思い切って、赤木先生から伺った携帯電話番号に電話してみた。声楽家らしい、はっきりしたお声の女性が電話口に出られた。

見ず知らずの中年の男から、突然電話が来れば、驚かないわけがない。オレオレ詐欺と疑われても文句は言えないだろう。私は何回も自己紹介をシミュレーションし、想定したとおりに、ゆっくりと、自分が附設高校の卒業生であること、附設高校の校歌を 70 年前に藪文人先生が作曲されたこと、校歌のルーツを探していること、藪文人先生のことを調べていること、赤木先生から連絡先を伺ったことを説明した。すると、藪淑子先生は、驚くと同時にとても喜ばれ、19 時 15 分から 1 時間以上、詳しくお話を伺うことができた。そのやりとりを以下に記す。

「義父の文人（ふみと）は、篠栗の妙福寺という寺の息子でした。たしか今は、文人の甥の子が就職をしているはずですが。実は私の甥（妹の息子）も、附設で6年間を過ごして、今は医者になり神戸に住んでいます。年は、40代半ばだと思います。丸山さんの2つか3つ下の学年ではないかしら。最初は寮にいたけれど、途中から寮を出て、北九州から通学していました。確か高速バス通学だった気がします。当時はそんなに遠いところからの通学は特別だったと聞いています。高校卒業後は東北大学医学部に進学しました。甥の父（私の妹の夫）は、昭和6年生まれで、山口大学から九州大学医学部に編入し、医者になりました。3年前に他界しましたが、若い頃はフランスに留学していて、仏独の国境近くだったのでドイツ語も堪能でした。私には、医学のことは話してくれず、『音大卒だからドイツ語は得意だろう』と、ドイツ語のことばかりいつも話しかけてくるような人でした。医者だけど、語学が本当に得意でした。このように私の妹は医者一家で、もう一人の甥（附設に在学していた甥の兄）は佐賀医大に進学しました。ただ、その甥は数年前に脳出血で44歳の若さで亡くなりました。妹はその甥と暮らしていましたが、その死に深く嘆き悲しみ、一人になった妹を今は附設に通っていた甥が神戸に引き取って、近くで暮らしています。人というのは、はかないものです。あっという間に死んでしまいます。」

「私の夫の博之は、本当に仏様のような夫でした。学生生活の2年間と、結婚生活の60年の間、声を荒げられるようなことは一度もありませんでした。博之と結婚できて本当に嬉しかった。笑顔がきれいな穏やかな人で、はっきりした性格の義父（文人）とは正反対でした。博之を表す言葉といえば、『忍耐力の人』でした。1年前に亡くなりましたが、60年間、毎日私に『大好き』と言ってくれ、私を幸せにしてくれた。息を引き取るその瞬間まで、私の手を握ってくれていたのよ。博之が亡くなった時は、ショックでしばらく歩けなくなってしまいました。今はもう歩けるけれど、毎日博之を思い出して、涙を流さない日はありません。私は今年で87歳になります。博之は85歳と一週間で、脳出血で亡くなりました。『一緒に米寿（88歳）のお祝いをしようね』と言っていたのに、残念です。」

< 藪博之・淑子ご夫妻（平成28年（2016）8月24日） >（藪淑子先生ご提供）



「私はもともと広島竹原という所の出身で、戦時中竹原に疎開していました。実家は医者で、私の弟の子が広島で医者をやっています。博之のことを詳しく聞いたかったら、博之の弟子の堺康馬（さかいやすま）君に聞くといいですよ。最近ハガキをくれたのですが、今は 60 過ぎくらいで、埼玉でピアノ講師をしています。堺君は、小学校のときにピアノを習いにきていたのよ。あの頃は、宮崎や熊本からも、博之にピアノを習いに福岡の自宅まで生徒が来ていたわ。」

「博之と義父（文人）は、性格は正反対でした。義父は厳しい方で、声は大きいし、レッスンは怖いという人もいました。でも、ピアノのレッスンの怖さや厳しさというのは様々なよ。私は、何も言われず叱られず、弾いてもじっと黙っている教師の方が怖かったな。」

「博之の代は、明善高校から東大に 5 人入ったと聞いています。そう、博之は明善高校を昭和 27 年（1952）に卒業しているのだけれど、義父もその頃は明善で音楽を教えていて、博之は学校で義父に音楽を習うのが嫌だったと言っていました。」

「義父（文人）は 3 拍子が好きだったかですって？アハハ、3 拍子の校歌を作ったのはたまたまじゃないかしら。」

「義父（文人）はお酒が好きな人でした。私は昭和 33 年（1958）に藪家に嫁入りし、久留米で半年間、義父と一緒に過ごしました。義父はバラが好きで、ピースというクリーム色のバラを大事に育てていました。弦バラを庭の裏にたくさん植えていて、義父の腕はいつも棘で傷だらけでした。私が梯子に登って弦バラを上手に切ると、すごく喜んでくれました。約束ごとや決まりごとに厳しくて、嫁として叱られたことも多かったわ。お酒が好きで花が好き。愛車はダットサン。義父は、お酒は豪快に飲み、いつも腕はバラの棘で傷だらけで、愉快的な人でした。いつも静かで、ピアノと話すような博之とは正反対の性格でした。」

厳格な父、文人氏と温和な息子、博之氏。同じ音楽家でありながら、対照的な性格の親子だったようである。前述の明善新聞にもあるとおり、バラが好きで、ドライブの愛車はダットサンだったようだ。

ちなみに、藪淑子先生は、俳号「藪斗四子」の名で「花杏（はなあんず）」という句集を出しておられ、夫の博之氏を詠んだ句の他に、義父の文人氏を詠んだと思われる句もある。それぞれ一句紹介する。

「麦秋の一日ピアノに向かう夫」

「思ひ出の舅バラ咲かせ音楽家」

途中で中断してしまったが、藪淑子先生の電話でのお話に戻ろう。藪文人先生の最期は、ある日突然やってきた。

藪文人先生の急逝 名曲「筑後川」と共に逝く

藪淑子先生は語る。

「そう、あれは昭和44年（1968）6月27日でした。その日は、義父（文人）は朝から興奮していました。東京音楽学校時代の旧友である木下保（きのしたたもつ）が、東京から久留米に来ていて、今から会うんだ、木下君が團伊玖磨君の『筑後川』の音源を持ってきてくれているので、みんなで鑑賞会をやるんだ、と、嬉しそうにダットサンで、3人で出かけていきました。」

「私も、『團伊玖磨という作曲家は、若いけれど最高だわ』と思っていました。その3人というのは、義父（文人）と、義父と一緒に久留米音楽協会で活動していた本間四郎さん、それと傍示（かたみ）さん。傍示さんはお寺の方だったわ。さっきおっしゃた、最初に丸山さんが電話された方（本間敬二先生）は、本間四郎さんの次男よ。」

「東京からやってきた木下保先生は、義父（文人）と会うなり、義父のところにやってきて、お互い抱き合って再会を喜んでいたそうです。そして、木下保先生、義父、本間四郎先生、傍示さんの4人で、BSのホール（注1）に『筑後川』を聴きに行ったそうです。」

「その後聞いた話によると、『筑後川』の曲が流れている途中で、『ううう・・・』という義父の苦しむ声が聞こえてきたそうです。心筋梗塞でした。義父は、『筑後川』を聴きながら、BSのホールで亡くなりました。ホールに置きっぱなしだったダットサンは、後で誰かが取りに行きました。義父の干支は巳年だったので、明治38年（1905）生まれでした。昭和44年（1968）6月27日死去、享年64歳でした。」

この話を聞き、私は衝撃を受けた。藪文人先生は、「久留米市の歌」や「久留米大学歌」の作曲仲介などで縁のあった團伊玖磨氏作曲の名曲「筑後川」を聴きながら、盟友木下保氏や本間四郎氏、傍示暁了（かたみあきら）氏の見守る中、64歳の生涯を閉じたのである。

ちなみに、『筑後川』が久留米市の石橋文化ホールで作曲者團伊玖磨氏の指揮で久留米音協合唱団により初演されたのは昭和43年（1968）12月20日であり、楽譜初版が発売されたのは昭和44年（1969）8月20日であることから、楽譜発売前に他団体が演奏することは考えにくく、藪文人先生が6月27日に最後に聴いた音源は、初演の音源だったのかも知れない（注2）。

最後まで「筑後川」を聴くことができず、心残りであったに違いない。第5章『河口』の感動的なフィナーレまで、ぜひ聴いていただきたいかったものである。なお、藪淑子先生によると、藪文人先生のご逝去後、石橋文化ホールで九州交響楽団による追悼コンサートが開催され、ご子息の藪博之氏が指揮をなされたそうである。

（注1～2）その後、2020年4月、本間敬二先生から、藪文人先生ご逝去時の詳細な情報を伺うことができた。内容は以下のとおり。

- ・藪文人先生がお亡くなりになった場所は、BSホール（石橋文化ホール）ではなく、「BSクラブ（ブリヂストンクラブ）」。BSクラブは、ブリヂストン久留米の福利厚生施設で、一般にも広く貸し出されている。
- ・昭和38年（1963）、石橋文化ホールが完成した時に、筑後地域に健全な音楽文化の普及発展を目

的とした久留米音楽文化協会が設立された（平成12年（2000）解散）。合わせて、市民音楽の育成のため協会所属の合唱団「久留米音協合唱団」も設立され、初代指揮者に就任したのが、本間四郎氏（本間敬二先生のお父様）。

- ・昭和43年（1968）12月、久留米音協合唱団は、創立5周年を記念して作曲：團伊玖磨、作詞：丸山豊に新曲の委嘱をした。この時に生まれたのが混声合唱組曲「筑後川」である。
- ・この曲は日本合唱界のベストセラーとなり、今でも日本全国各地の合唱団や中学校の卒業式などで広く歌われている。
- ・久留米音協合唱団は、この曲を歌いこんで昭和45年（1970）の全日本合唱コンクールを目指すことを決める。そこで、本間四郎氏が懇意にしていた藪文人先生を通じて、木下保先生に合唱指導を依頼した。
- ・指導当日、合唱団の練習場でもあったBSクラブにて、夜の練習の前に久留米音協合唱団が録音したレコードを聴きながら4名で打ち合わせをしようとしていた時、藪先生はお倒れになられた。
- ・翌年の全日本合唱コンクールにて、久留米音協合唱団は、初参加ながら見事に銀賞を獲得した。

<参考>藪文人先生の葬儀式次・抜粹（本間敬二先生ご提供）

日時 昭和44年（1969）7月1日 午後3時
式場 久留米市西町六軒屋 光明寺
導師 紫雲山光明寺住職 傍示 暁了 師
喪主 藪 博之 殿
葬儀委員長 久留米音楽文化協会理事長 竜頭文吉郎 殿

「久留米音楽の父」と称えられる故藪文人先生は明治38年6月4日粕屋郡篠栗町に妙福寺住職藪潜龍氏の三男として出生。

福岡師範、東京上野音楽学校（現在の東京藝術大学）を御卒業昭和5年茨城師範より県立久留米高等女学校（現在の明善高校）に赴任されました。

当時はピアノの演奏家の珍しい時代でもあり、自らリサイタル、或は九州演奏旅行など演奏活動をされると共にピアノ教師として後進の指導に多大の努力を払われ幾多の俊才を育成された。

戦後は混乱期のさなかに、いち早く久留米音楽協会を設立され、幾多の困難を克服して演奏家の招聘、合唱団の育成に心血を注がれ、今日、全国に名を知られる久留米音楽文化の基礎を築かれた。

そのお人柄は清廉潔白およそ曲がった事のきらいな正義感に溢れ更に責任感の強い方である一方花を育て犬を愛する優しい一面をお持ちでした。

昭和40年明善高校を勇退後カワイ音楽教室指導講師、東和大学講師を務められ、更に今後地方文化の向上に先生の御活躍が大いに望まれて居られました。

然るに6月27日BSクラブに於て久留米音協主催の合唱教室の講師として来久された木下保先生と当夜の音協合唱団の指導打合せのためレコードによる「筑後川」の第1楽章がはじまった直後、突如急変、数分にして木下先生と傍示氏に抱かれ不帰の客となられた。

時に午後2時30分 行年64才

死に至るまで音楽的な先生の生涯は同時に久留米の音楽の歴史そのものでもあった。

惜しむべし謹んで御冥福を祈ります 合掌

法名 浄楽院釋一道居士

合唱名曲「筑後川」と附設の深い縁

ここで、藪文人先生が人生の最期に聴かれた『筑後川』と、附設高校の深い縁について、一言触れておきたい。

<混声合唱組曲「筑後川」>ウィキペディア (Wikipedia) より

『筑後川』(ちくごがわ)は、丸山豊作詞、團伊玖磨作曲による混声合唱組曲である。久留米音協合唱団の5周年記念委嘱作品として作曲された。ブリヂストン2代目社長・石橋幹一郎が、義兄である團に依頼して作曲された。昭和43年(1968)12月20日、福岡県久留米市の石橋文化ホールにおいて作曲者自身の指揮により初演された。曲の完成の遅延により演奏会は2度延期され、公演の3日前にようやく団員全員に楽譜が渡された。昭和44年(1969)に楽譜が出版された。10万部を超えればヒットとされる合唱曲の中で、2018年時点でカワイ出版発行の楽譜は100刷を数え、累計では17万部または20万部を超す数を発行し増刷を重ねている。

上記「ブリヂストン2代目社長・石橋幹一郎」氏(昭和12年(1937)明善卒、福高を経て東大法科へ)は、久留米大学元理事長の石橋正二郎氏の長男であり、大石亀次郎先生の明善時代の教え子である。また、石橋正二郎氏は、現在の附設高校の敷地を無償で提供していただいた人物であり、附設高校の発展に欠かせない決断をされた方である。

昭和40年頃の附設高校では、旧御井校舎は古くて狭く、学校移転・校舎新築が課題となっていた。これが、昭和40年(1965)7月末の法人理事会における石橋正二郎理事長の提案(無償での寄贈)で一決した。その提案は、「さて皆さん、附設高校も(原)校長がみえたので、学校移転をしようではありませんか、土地は私が上げます。正源寺の山を上げますので、皆さんどうぞ協力下さい。(原文ママ)」というご発言で、昭和40年(1965)1月6日、23,677㎡が寄贈された。現在の校舎がある場所への移転は、昭和43年(1968)7月に行われた(附設高等学校二十五年史より)。

この新校舎への移転にあたり、附設高校後援会長としてご尽力いただいたのが、『筑後川』作詞者で詩人・医者丸山豊氏である。丸山豊氏も大石亀次郎先生の明善時代の教え子である。長男丸山泉氏(16回生)の入学とともに、後援会長を3年間務めていただいている。

また、久留米音協合唱団の指揮者である本間四郎氏の父親である本間一郎氏は、附設高校の初代父兄後援会長(P T A会長)として、昭和25年度(1950)から29年度(1954)までの5年間務めており、昭和26年(1951)1月25日には、附設高校にストーブを寄贈している。後述するが、本間一郎氏は、藪博之氏と藪淑子先生が結婚するときの仲人を務められており、結婚式にはもちろん藪文人先生も列席している。また、本間敬二先生によると、藪文人先生は、昭和35年(1960)の本間四郎氏の結婚披露宴の際にも、仲人さんの隣に座り、主賓としてご挨拶をされたとのことである。

なお、男く祭におけるコーラス大会は、24回生の齋藤実行委員長のときに、石橋文化ホールへ進出して一段と飛躍したものとなり、この時から、審査を本間四郎先生にお願いし、懇切丁寧な講評をしていただくようになっている。昭和52年度(1977)の男く祭初日は、石橋文化ホールで開催され、県下に

名を知られた朝倉高校コーラス部が友情出演し、「筑後川」を歌い、本格的に鍛えられたその合唱は附設生に大きな感銘を与えたという。

筆者の私も、高校2年の時、昭和62年(1987)の男く祭のコーラス大会で、37回生同期の森藤晶司君の伴奏で、「筑後川」の第4章「川の祭」を歌ったことを覚えている。

灰塵に帰した校歌原譜と残された一枚の写真

話を藪淑子先生との会話に再び戻す。

私は、藪淑子先生ならば、藪文人先生の遺品として、昔の作曲ノートをお持ちなのではないか、もしかしたらその中に、失われた附設高校校歌の原譜があるのではないかと淡い期待を抱き、藪淑子先生に質問した。しかし、藪淑子先生のお話を続けて聞くと、それはもはや叶わぬ夢ということがわかった。以下は、藪淑子先生から伺った悲しい火災事故の話である。

「義父(文人)の家は西鉄久留米駅の近くの櫛原にありました。義父の死後、博之の母と妹が二人で暮らしていましたが、電気こたつから出火して火事になり、全焼してしまいました。なので、藪家の実家のものはみんな燃えてしまい、何も残っていません。義父の作曲資料も、何も残っていません。」

「私の手元にある義父の思い出は、昔もらった一枚の写真だけ。この写真のコピーを丸山さんにお送りしますね。教え子と一緒に嬉しそうに楽しそうに笑って写っている写真です。その教え子の名は中村八大君。とってもいい写真ですよ。」

<中村八大氏(左)と藪文人先生(右)>(藪淑子先生ご提供)



附設高校校歌の原譜は、灰燼に帰し、どうやら二度とお目にかかれることはないようだ。藪文人先生作曲の正しい原曲は、附設1～5回生くらいの脳裏にだけ、思い出として残っているかも知れない

が、変わり続けていく校歌というのも、また一つの在り方であろう。今頃、藪文人先生は、中村八大氏と一緒に、原曲と少し違っている可能性がある今の校歌を、天国から笑ってみているのかも知れない。

藪淑子先生とのお電話も終わりに近づいてきた。この日、最後に交わした会話は以下のとおりであった。

「丸山さんの学校（附設）は久留米だったわね。私の親戚も久留米には縁があって、私の弟の妻の父が、古森善五郎（こもりぜんごろう）といって、久留米医大の教授だったらしいわ。ドイツにも留学していたらしいです。博之の妹も7年前に亡くなりました。博之と私には子供がいないので、私が藪家の最後の一人になりました。私が死ぬと、藪家はなくなるけれど、義父（文人）の作った校歌が歌い継がれているなんて、とても素敵なお話を伺いました。義父もきっと喜んでいるでしょう。」

「博之とは、『死んだら今度は金星で会おうね』と話していました。先に博之が行っちゃったけどね。博之とは今度は金星で会う予定です。夕べも夜空がとてもきれいだったわ。」

「同窓会はいつなの？ 10月10日ね。それまで生きていられるかわからないけれど、今日はとても良いお話を聞かせていただきました。校歌の楽譜を送っていただけるとのこと、楽しみにしています。お元気で。」

藪淑子先生が10月同窓会に来ていただけることに

2020年2月13日（木）の夜、会社からの帰宅途中、藪淑子先生から携帯に電話をいただいた。電車の中だったので、東中野駅で降りて、駅のホームからかけ直し、新しいお話を聞かせていただいた。

内容は以下のとおり。

「本間一郎さん（注：附設高校初代後援会長）は、本間四郎さんのお父様で、本間敬二さんのお祖父様にあたる方ですよ。私は博之さんと福岡市で結婚式を挙げましたが、本間一郎さんが仲人だったんですよ。もちろん、義父（藪文人先生）も出席されておられます。本間一郎さんは、私のことを『トコちゃん』と呼んで可愛がってくれました。敬二さんはまだ小さかったから、覚えていないんじゃないかしら。本間一郎さんは病気をされて、退院されてから亡くなられました。」

「私は広島竹原出身で、旧姓は中島（なかしま）です。医者で、博之さんとは武蔵野音楽大学で出会いました。博之さんはピアノ科でしたが、私は声楽科でした。酉年で、博之さんより少し生まれが早かった。」

「私の父は、博之さんと結婚するときは、『九州なんて遠いところまで行けるか』と最初は反対していましたが、お義父さん（藪文人）が、明善の親友のバンノ先生と一緒に広島まで来てくれて、『博之は淑子さんと結婚できないなら死ぬと言うとります』と言ってくれて、『お父さまがそこまでおっしゃるなら』と、両親が福岡まで来てくれたんです。」

「博之とは、ずっと夫婦で歌っていました。家には、ドイツ製のアップライトピアノがあって、今でも弾いています。私は36歳の時に俳句を勧められて、それから50年、俳句を趣味で続けています。歳時記は素晴らしいわよ。あなたもお読みなさい。」

「義父は『BSのホールに行く』と言って出かけました。義父、木下保さん、本間四郎さん、傍示（かたみ）さんの4人で聴いているときに、『あー、うー』という義父の苦しむ声が聞こえてきて、そのまま亡くなったと聞いています。曲（筑後川）は、それは喜んで喜んで聴いていたそうです。」

「附設高校の校歌だけど、堺康馬君から電話をもらい、インターネットに音源も載っていると聞きました。私はガラケーだからインターネットとかよくわからないのだけど、堺君から電話越しに校歌を聞かせてもらいました。」

「3拍子は歌いやすいと思うわ。カッコよいし、男の子は特に手をたたきながら元気よく歌っていたんじゃないかしら。お義父さん（藪文人氏）はハイカラだったからね。」

「博之が指導を受けていた福井直俊先生は、お義父さんの友達で、東京藝大の学長や、文部省の役人も務めた方。博之が言うには、直俊先生は学校の許認可の権限をお持ちだった偉い方だったのだけど、御付きの部下がズラーっと並んでいる中で、複数の候補から新設校を選んで認可するときに、『藪（文人）がいるから福岡しかないだろう』と言っていたそうよ。私もとてもかわいがってもらったわ。また、福井直俊先生のご子息の福井直敬さんも良く知っているわよ。今は武蔵野音楽大学の学長をされています。」

「博之の教え子に、大坪由里（武蔵野音大講師）というピアニストがいます。とっても上手よ。堺康馬君は、6～7歳の頃から、大牟田から福岡までピアノを習いに通ってきていたのよ。ドイツにも留学していたわ。」

「私の福岡にいる友達も、身寄りのない三原で一人暮らしをするより、福岡に帰ってきたら？と誘ってくれるのだけど、博之と10年以上過ごしたこの思い出の地は離れられません。」

といった感じで、新しく聞く様々なことについて、楽しくお話を伺っていたところ、最後にもっと嬉しいお話をいただいた。

「10月10日の同窓会はとっても行きたい。いや、必ず行きます。3拍子の校歌を聴いてみたい。博之もあと2年生きていたら聴けたのに惜しかったなあ。お義父さま（藪文人氏）も喜ぶと思います。私は藪家の最後の一人ですからね。みんなの分までしっかり務め上げます。カレンダーの10月10日のところにもう書き込みました。足が少し悪いけれど、付き添ってくれる人はいるから心配しないでください。お元気でお過ごしください。」

藪淑子先生が東京支部の同窓会にいらしていただける！ これは天国の藪文人先生にもしっかり届くように、大手町サンケイプラザに集う同窓生300人の大合唱に向けて企画しなくてはと、東中野駅の

ホームで想いを新たにしたのであった。

帰宅後、これまで調べた藪文人先生の資料や、校歌の楽譜（藪文人先生の復元楽譜や滝田卯夫氏の初代校歌の楽譜）一式を、藪淑子先生に郵送した。

藪文人先生の生家 妙福寺（篠栗）

2020年2月16日（日）の夕方、藪淑子先生がお話されていた「妙福寺」が気になり、ホームページに記載されていた電話番号に電話し、附設高校校歌作曲者である藪文人氏のルーツを調べていることを説明すると、妙福寺第12代坊守の藪美恵子（やぶみえこ）さんが、非常に丁寧に教えてくれた。

藪美恵子さんは、藪文人先生のお兄様である藪獅吠（やぶしこう）氏の長男、藪正明（やぶまさあき）氏の奥様である。藪文人先生からは甥の嫁にあたる方で、ご主人は藪博之氏の従兄弟にあたる。藪美恵子さんにうかがった藪文人先生のお話は以下のとおりであり、芸術に秀でた一家であったようである。藪文人先生の間味が伝わる一面と、長男博之氏に対する複雑な想いが垣間見られた。

<藪美恵子さんのお話に登場する藪家のみなさま>

- ・藪文人（やぶふみと）先生：附設高校校歌の作曲者、東京音楽学校卒、明善高校教師
- ・藪博之（やぶひろゆき）さん：藪文人先生のご長男、明善高校卒、武蔵野音大卒、ピアノ講師
- ・藪恵子（やぶけいこ）さん：藪文人先生のご長女、藪博之氏のご令妹
- ・藪淑子（やぶとしこ）さん：藪博之氏の奥様（旧姓：中島）、武蔵野音大音楽科卒
- ・藪潜龍（やぶせんりゅう）さん：藪文人先生のお父様
- ・藪獅吠（やぶしこう）さん：藪文人先生のお兄様
- ・藪貞子（やぶていこ）さん：藪文人先生のご令妹
- ・藪正明（やぶまさあき）さん：藪獅吠氏のご子息、藪文人先生の甥、藪博之氏の従兄弟、現・妙福寺住職のお父様
- ・藪美恵子（やぶみえこ）さん：藪正明氏の奥様、妙福寺第12代坊守、現・妙福寺住職のお母様

「私（美恵子）は、文人の甥の嫁、つまり義理の姪にあたります。文人おじさんは、久留米に住んでいましたが、篠栗の実家に良く来てくれていました。湯豆腐が大好きで、文人おじさんが帰ってくると、湯豆腐を作るのが私の役目でした。湯豆腐があれば、あとは何もいらず、焼酎をぐいっと美味しそうに飲んでいました。」

「文人おじさんには子供が二人いて、博之さん夫婦（妻・淑子さん）はよく知っています。お寺の本堂にはグランドピアノがあって、篠栗に帰ってくると、まずはお参りしてから、すぐピアノの前に座って弾いていました。そして、庭に出て、庭を眺めておられることが多かったかな。その間に私は湯豆腐を作っていました。文人さんのお父様（藪潜龍さん）には、私はお目にかかったことはありません。」

「2回ほど、久留米・櫛原の文人おじさんの家に遊びに行ったことがあります。私が行ったときは、割と静かな印象の方でした。私の次男をととてもかわいがってくれましたし、音楽会もやってくれま

「藪恵子さん（藪文人氏のご長女、博之氏のご令妹）は、音大を目指してピアノを練習していましたが、『親から無理やり押し付けられた。私はもうピアノはやめるから。』と、私に愚痴を言っていました。私は藪家の外から来たので、愚痴も言いやすかったのでしょうか。お兄さんの博之さんは、ピアノが性に合っていたのか、そのまま音大に進みました。」

「文人おじさんの奥様は、小柄で静かな方でした。どのようなお声だったか、声も聞いたことがないくらいです。昔の明治生まれの夫婦はそんな関係だったのでしょいかね。でも文人おじさんはとても愛妻家で、いつも奥様にべったりしていましたよ。（笑）」

「久留米に遊びに行くと、文人おじさんはいつも芝刈りをしていました。広い庭にバラと松を植えて、きつといつも芝の上で焼酎を飲んでいたのでしょいかね。火事で燃えてしまったのは残念でした。」

「聞いた話では、文人おじさんは、大学の方と、音楽祭で音楽を聴きながら亡くなったと聞いています。文人おじさんが亡くなった時、私の夫（藪正明氏）が号泣したのを覚えています。夫は、文人おじさんにとてもかわいがられていたのじゃないかしら。それを聞いた博之さんは、自分にはそんな風に『かわいがる』という感じではなかったのに、と、ちょっと意外だったみたいです。自分の息子には照れ臭くて、他人の子とは同じようには接することは難しかったのかも知れませんね。」

「妙福寺は、昔は町中であって、過去に3回くらい火事にあっています。義理の母（藪獅吠氏の奥様）の実家が資産家で、今の地に移転するのに援助したと聞いています。また、貞子さんの義理のお父様は元衆議院議員で、篠栗線を誘致した方です。篠栗の歴史書には名前が載っています。」

「残念ながら、文人おじさんの写真は妙福寺には残っていません。本堂ではピアノとお話をしている感じでした。私の主人も、お酒を飲むと、ピアノの横にウイスキーを置いて、ウイスキーを飲みながら弾いていました。いつのまにか、私もピアノが大好きになり、私の下の子も大学に入るまではピアノを習っていました。」

「(同窓会の冊子に伺った話を載せたいと話したところ) 是非その冊子を見たいです。妙福寺に来られることがあったら、小さなお寺ですが、ぜひご覧になっていってください。」

附設のOB・OGで、篠栗に寄られた方は、ぜひ妙福寺に足を運び、校歌作曲者藪文人先生に想いを馳せていただきたい。校歌のルーツを体感できるのではないだろうか。

<妙福寺本堂（外観）>



<妙福寺本堂（内観）>



※筆者が後日訪問した際に、許可を頂いて本堂の外観と内観を撮影させていただきました。

(藪美恵子さんはその日は外出中で、残念ながらお会いすることはできませんでした)

校歌楽譜の感想と藪博之さんのこと (藪淑子先生より)

2020年2月20日(木)の夜、藪淑子先生から、資料や楽譜送付のお礼のお電話をいただきました。今回も電話で楽しくお話をさせていただき、曲が変更になった理由や3拍子にした理由を推測いただきました。また、ご主人の藪博之さんとの三原での14年に及ぶ長い闘病生活の思い出を、じっくりと語っていただきました。

「楽譜やいろいろな資料をお送りいただき、ありがとうございます。ものすごい量で驚きました。インターネットはいろんな情報があふれているのですね。こんなことまで載っているのかと、びっくりしました。年を取っているので、読むのがとても大変でした。」

「楽譜も興味深く読ませていただきました。今日は1日、義父(藪文人氏)作曲の楽譜と、もう一つの楽譜(滝田卯夫氏作曲)の楽譜を見て歌っていました。義父の方の楽譜だけれど、3か所、符点気がなったところがあり、その3か所は修正した方が歌いやすいんじゃないかな、と感じました。」

「(お送りした楽譜は復元楽譜であり、原譜とは違っているかも知れないことを説明すると、)あらまあ、そうなのね。義父だったら、どう作曲したかですって? それはわからないわね。」

「曲が義父の曲に変更になった経緯はわかりませんが、まあきつと、附設高校の先生方の方で何らかの理由で曲を変更したくなって、義父にお声かけいただいたのでしょうね。義父も、それを受けて、男の子らしく歌える曲を考えたんじゃないかしら。わかりませんがね。」

「最初の曲(滝田卯夫氏作曲の初代校歌)は義父の曲とは曲調が全然違うわね。でも、こちらもいい曲よ。ちょっと楽譜に拍の長さがおかしいところがあるけれど。(書き写した人が間違えた可能性もあることを伝えると)あらそう。いい曲だけれど、きつと何か事情があつて、曲を変えることになったのでしょうかね。」

「博之のことも、もう少し詳しくお話しさせてください。博之は平成17年(2005)2月8日に脳出血で倒れ、日赤病院に運ばれました。お医者様からは、『出血の場所が悪く、手当の方法がない。手術も手当てもできず、どうしようもない。もって1~2日の命です』と言われました。」

「お医者様に手術の署名・捺印をして、集中治療室に入りましたが、意識はもうありませんでした。手術の先生に、『最後だから、お願いだから、博之に曲を聴かせてあげていいですか』とお願いして、24時間、曲(博之が倒れる直前に買ってきて聴くのを楽しみにしていたモーツァルトのレクイエム)を流し続けました。」

「でも、その後、博之は14年間生きてのです。私の弟が、広島の新三原に新しい病院が出来たと教えてくれ、そちらの入院第一号となりました。意識のない博之を連れ出し、縁もゆかりもない三原に2005

年7月26日に着いて、そのまま入院しました。あまり意識もなく、ものも言えない状態でした。」

「そのまま、博之と一緒に三原で14年過ごしました。車椅子で博之を海まで連れて行くなどするうちに、コーヒーを飲むまでに快復しました。博之は食いしん坊だったの。14年間のうち、途中で肺炎に3回かかりました。そして、昨年(2019年)の1月13日に、昇天しました。本当に無念でした。」

「丸山さんは義父(藪文人)のことをお調べだけど、博之がどんな人だったかということもお伝えしなかったの。博之は、義父の文人から、3歳からピアノのスパルタ教育を受け、絶対音感を持っていました。耳は最高に良かった。お風呂の音や豆腐屋さんの音が聞こえてくると、これは何の音、とよく話していました。」

「家でお父さまから厳しい指導を受けた後、上京してからは佐藤博子、井口基成ご夫妻のレッスンを受け、成城に通っていました。博之はピアノが上手で、音色も本当に美しかった。でもちょっとメンタルは弱かった。」

「ピアノはただ弾くだけではだめで、指が一本ずつ独立していなくてはいけないの。指を一本ずつおろしていく練習をしていたわ。博之の指はよく動いて、音楽がきれいだった。堺康馬君には小学生の頃から教えていたわ。赤木泉君もとても音がきれいよ。」

「井口基成先生は、大きくてとても怖い先生でした。怒られる時は足で蹴られていたそうです。昭和20年代の話だけど、いまだったらアウトね。その頃の武蔵野音楽大学には、まだ大学院がなくて、4年生の上に『専攻科』というものがありました。」

「博之はそこで学び、もっとピアノを東京で続けたかったのだけれど、筑紫丘高校の音楽教諭をしていた先輩のキリヤマナオミ先生から、後任としてどうしても来て欲しいといわれ、福岡に戻り、筑紫丘高校の音楽教諭となりました。」

「そして筑紫丘高校勤務で10年経ったときに、今度は先輩のエグチヤスユキさんに、『良い音楽教師を連れてきて欲しいと福岡高校から頼まれている』と言われたのです。博之は慣れ親しんだ筑紫丘高校から離れたくなかったのだけれど、エグチさんに土下座までされたので、福岡高校に転任しました。筑紫丘高校の生徒達もとても悲しみました。」

「福岡高校勤務で10年が経ったとき、今度は熊本音楽短期大学の学長からどうしても来て欲しいと誘われ、福岡市南区の自宅から熊本まで車で通っていました。この長距離通勤はつらそうで、時々熊本のホテルに泊まっていました。ここでも十年くらい勤務しました。」

「その後、筑紫丘高校の教え子で、博之のことを神様と慕う子がいて(多分今は70歳くらい)、福岡に帰ってきてくれと頼まれ、第一保育短期大学の講師になりました。そこでピアノを教えているときに倒れたのです。」

「博之は、毎日コンクールの審査員も長いこと務めていました。色んな人たちからお誘いを受け、第一保育短期大学の校長先生は、『藪先生は神様』とまで言ってくれました。博之の一周忌には、たくさんの方が三原まで来てくれました。たった一部屋の小さなところで何人もやってくるので、窮屈でした(笑)。」

「私も福岡に住んでいた時は、香蘭女子短期大学というところで講師をやっていました。博之が倒れたので71歳で辞めましたが、辞めるときには、たくさんのお教え子たちが送別してくれました。」

「二人で何も知らない三原に来たのですが、近くにあるポポロという音楽会場に良く音楽を聴きにいきました。車椅子で博之を連れて行くと、博之はとてもうれしそうでした。」

「わたしの兄弟がいうには、今年は母の50回忌なのですが、思い返せば義父の50回忌をやっていませんでした。丸山さんが連絡をくれたのは、本当に不思議なご縁です。義父のことを思い出させてくれて、本当に感謝しています。楽譜を送ってくれて、今日はたくさん歌いましたわ。」

「義父(文人)は湯豆腐が好きで、冬は毎日湯豆腐と、ハイウオ(羽魚)という魚の刺身で一杯飲んでいました。博之は、ドイツに行きたがっていました。東京でももっと勉強したかったらうと思います。赤木泉君も堺康馬君もドイツに行きました。堺康馬君の息子さんは二人とも声楽家です。」

「歳時記は俳句だけでなく、日本の風物そのものよ。(藪淑子さんの句集「花杏(はなあんず)」を国会図書館で読んだことをお伝えしたところ、) ええー、いやだもうびっくり。どこで読んだの?どこに本があるかわからないわね。丸山さんに一冊お送りしようと思っていたところよ。」

「博之が倒れた後の句集は作っていないから、死ぬまでにもう1冊書けないかと思っているの。知り合いにドイツ語訳してもらおうかと考えています。私の誕生日は博之よりも前です。博之は2019年の1月6日に85歳の誕生日を迎えましたが、1月13日、良い笑顔で静かに逝きました。」

「14年前、倒れる前の日に、『今日しか遊ぶ日がない。明日からは忙しくなる。モツレクを聴きたい。』とあって、土砂降りの中、博多駅にモーツアルトのレクイエムを買いに行きました。お昼は二人でそばを食べました。なぜ、モーツアルトを聞きたくなったのか、不思議な気がします。その後、よく14年も生きてくれたと思います。生きたいという執念だったのでしょうか。」

「ピアノは町に寄贈しました。今住んでいるところから5分くらいのところにホールがあり、毎月無料コンサートが開かれています。」

「丸山さんには本当に感謝しています。10月に東京に行けるように、足をマッサージして過ごします。お風邪などひかぬよう、お気をつけてお過ごしくださいませ。」

藪文人先生の思い出（久留米高女 50 回生 野尻絹乃さん）

2020年2月29日（土）、筆者が福岡県筑紫野市の実家の母に、「誰か知り合いに久留米高等女学校出身の方はおらんね？」と電話で聞いたところ、ご近所の野尻絹乃さん（旧姓：田中）が、久留米高女卒だという。母から野尻さんに、藪文人先生をご存知か聞いてもらったところ、入学から卒業まで、ずっと藪先生に音楽を習い、とてもかわいがってもらったとのことだった。

髪の毛はチリチリで変わった髭を生やしていて、一目で変わった人だと思ったそうだ。自己紹介で「藪です」と言われたときは、ヘアスタイルを自分で「やぶ」と冗談を言っているのだと思ったらしい。東京音楽学校出身で、楽典は女学校では難しいだろうからと、授業では歌と一緒に歌ったそうだ。戦時中は、国の指示で歌ってはいけない歌もあったが、歌の時間はとても楽しかったとのことであった。とても優しい先生だったが、怒ると怖かったらしい。

母を通じて、野尻さんに藪文人先生の思い出を一筆お願いしたところ、なんと朝10時に頼んだのに、午後3時過ぎには原稿用紙1枚の原稿を母の元にお届けくださり、卒業アルバムや藪文人先生が写っているスナップ写真も貸していただいた。女学校時代の藪文人先生と生徒のつながりがわかる、野尻絹乃さんの寄稿をご紹介します。

藪先生の思い出

昭和19年（1944年）空襲のサイレンで入学した久留米高女で初めて藪先生に出会いました。頭がもじゃもじゃで渾名かと思ったほどです。沢山の女学生愛唱歌を教えて頂けたことは、ほんとに幸せでした。子守唄もシューベルトからジョスランまで。

でも恐かったのは下手でも良いから元気よく独唱することで、誰も手を挙げないとピアノがジャーンと大きくなり、怒って職員室に帰られます。恐る恐る謝りに行き、ふるえながら歌ったものでした。戦中戦後の激動時代を情緒豊かに過ごせたのは先生の歌のおかげも随分ありました。

学芸会の私の少年の役が気に入って頂き役名でずい分呼ばれました。先生の指導を受けたことは、私たちは自慢でした。

卒業がバラバラだった私達は明善の男子と一緒に一九会と命名、今年卒寿の同窓会を計画しています。あちらの藪先生も笑顔で見下さるでしょう。まだ一寸迎えに来ないで下さい。

久留米高女 五十回卒 野尻



藪文人先生（1948年頃）



藪先生（左）



野尻絹乃さん（旧姓田中）

- ・1931年（昭和6年）、滝田卯夫氏が40歳の時、山内俊次と共編で「新作昭和童謡唱歌 第一集～第六集」を出版。（1931年（昭和6年）5月25日発行、明治図書）

<収録曲>

第一集	「ピョンコロピョン」「雀のお宿」「風船玉」「金魚と鳥」「お月様」「かげ法師」「栗ひろひ」「木の葉」「餅つき」「お山の雪」「ひなたぼっこ」「島の兎」
第二集	「春の公園」「雀のお家」「さくらんぼ」「今日は雨ふり」「沖のお船」「山の音」「おねんね時」「木兎とお月様」「栗ひろひ歌」「ちゃぼとり寒かる」「寒い朝」「小犬コロコロ」
第三集	「学校の門」「かへる」「虹」「あさがほ」「飛行機」「朝の風」「通リゃんせ」「雀と鳥」「ねんねこ歌」「見えた見えた」「だるま」「はと来い」
第四集	「大日本」「鯉のぼり」「桑つみ」「船」「波」「おほし様」「椎の木と樫の實」「かごめかごめ」「雲のきれめ」「雪だるま」「毛糸の靴」「お雛祭」
第五集	「をどり」「あぢさい」「きやうだい」「ほたる」「水かがみ」「富士の山」「運動會」「麥まき」「こねこ」「手毬歌」「あられ」「四十雀」
第六集	「雨と風」「たんぼぼ」「私のうち」「青柿さん」「天氣のよい日」「星」「日本の花」「こいぬ」「子守歌」「はねつき」「ねや町」「夢」

- ・1948年（昭和23年）10月、57歳の時、福岡県柳川市立蒲池中学校の校歌を作曲。作詞は大坪都築（注7）。

- ・1951年（昭和26年）5月、60歳の時、福岡県私立久留米大学附設高等学校の初代校歌を作曲。作詞は同校漢文教師の大石亀次郎先生（注8）。なお、同年6月22日に、同校校歌は藪文人氏作曲の曲に変更され、現在に至っている。

（注1）「瀧田卯夫」と表記されることもある。

（注2）「著作権台帳文化人名録」（社団法人日本著作権協議会 第26版 2001年10月発行）「クラシック作曲」の項の1503ページに掲載。

（注3）2020年時点の地図では、この住所は造園会社になっている。国会図書館で遡ることが可能な最も古い1970年のゼンリン住宅地図でも、滝田卯夫氏とは別の方が既にこの住所に住んでいた模様。

（注4）上野正章「明治中期から大正期における洋楽器で日本伝統音楽を演奏する試みについて —楽譜による普及を考える—」（2012年3月 日本伝統音楽研究 vol.9）

（注5）公益財団法人日本近代文学館（目黒区駒場）に楽譜が所蔵されている。

（注6）日本幼稚園協会「幼児教育」第23巻第5号（大正12年5月22日発行）に、「先年御伽歌劇因果応報貝拾ひ黒子姫を著し有名の著者が今春来実演を重ね漸く上梓の運びとなりし本書は既に出版前より多数の御注文あり切に御実演を乞ふ」との記載がある。

（注7）柳川市立蒲池中学校ホームページ

https://www.city.yanagawa.fukuoka.jp/kyoiku/kyoiku/chugakko/kamachi_jh/gaiyou.html

（注8）「久留米大学二十五年史」（久留米大学二十五周年記念会、1954年）256～257ページに、滝田卯夫氏作曲の楽譜が掲載されている。また、大石亀次郎著「教壇五十年（1965年、339ページ）」にも、「作曲 滝田卯夫」との記載がある。

これらのことから、若い時は東京で活躍し、附設高校の校歌を作曲した戦後間もない頃は久留米や柳川など、筑後地方で音楽活動をされ、晩年はそのまま福岡で過ごしたか、山梨に戻られたかといったこ

とが推測された。また、子供向けの童謡や唱歌の作品が多いことから、きっと子供が好きな優しい方だったのではないかと想像した。

これだけの童謡作品を残しており、柳川にもゆかりがあることから、年齢的に「北原白秋」や「赤い鳥」などの関係書籍からたどっていけばきっかけがつかめると思ったのだが、なかなかヒットしない。地元であれば何か情報が得られるかも知れないと思い、山梨県韮崎市役所教育課にも協力を仰いだが、わからないようだった。滝田卯夫氏が校歌を作曲している蒲池中学校にもメールで問い合わせたが、2月の時点ではまだお返事をいただいていた（後述するが、この間、蒲池中学校の本園清高校長先生が丹念に調査してくれており、後日お返事をいただいた。）。

滝田卯夫氏の調査もここまでか、と諦めかけていたその時に、一冊の著書の一行の記述が、一筋の光明として、私の目に飛び込んできた。大石亀次郎先生の自伝、「教壇五十年」である。

柳河高等女学校音楽教諭 滝田卯夫先生

2020年2月22日（土）、附設37回生の同窓会幹事団打合せで、私は37回生同期の永江雅和君（専修大学経済学部教授）から、大石亀次郎先生の自伝「教壇五十年」を借りた。この本は、大石亀次郎先生が77歳の時に書いた自伝で、400ページにわたる大作である。永江君も冊子チームメンバーとして校歌のルーツを調べてくれており、ネットの古書店で「教壇五十年」を入手したとのことであった。

例によって、私は翌日の日曜日、「教壇五十年」を貪るように読んだ。大石亀次郎先生は、暁星小学校の先生だった時に、夏目漱石、与謝野鉄幹、菊池寛の子供たちを教えていたり、戦前は今の野菜試験場辺りで発生した、明善と南筑の生徒たちの決闘（ピストルや短刀も持っていたらしい）を丸腰で止めたりと、どのページを読んでも興味深い内容ばかりで、生前お会いしたことはないものの、校歌作詞者への興味と尊敬の念がどんどん深まっていった。

「教壇五十年」を1ページ1ページ、一行一句も見逃すまいと丹念に熟読していたところ、245ページで、遂に滝田氏と思われる情報にたどり着いた。大石亀次郎先生が柳河高等女学校（戦後、伝習館高校に統合）の校長を昭和18年（1943）4月に辞任する際のセレモニーで、滝田教諭が弾くピアノに合わせた大合唱に見送られて辞任した旨の記述があったのである。その一節を引用する。

二五 柳河高女よさようなら

昭和十八年四月私は三瀧中学校へ転出の辞令を受けた。四月九日いよいよ辞任式である。

講堂一ぱいがシーンとなる。最後の教訓だが言う事はなんにもない。もう教へ子は泣いて居る。なづかしい柳鬢の生徒たち。滝田教諭はピアノについた。柳鬢甘景の歌を合唱させる。優美な哀調と、流麗な環境とが身にしみ渡る。やっと第一節、二節位までくるともう嗚咽となり、泣き声となって、後は途切れてしまった。

啾々としてすすり泣き、遂にオオ、オオと声も高まる。私もすっかり胸がつまって、悲哀の美がこみあげる。大丈夫いつか眼に不覚の涙で、なんにも言へぬ。

「アア、もうよしよし。これでやめよう。」と言って、式を閉じた。

柳鬢よさらば。詩の国柳河、歌の国柳河。絵の国柳河よさらば。後ろ髪を引かれつつ三瀧の旅へ。

早速私は、伝習館高校同窓会事務局にメールし、週明け 2 月 25 日（火）の夕方、伝習館高校同窓会事務局に電話で問い合わせた。事務局の方は、事前に電子メールで問い合わせしていたので、少し調べてくれており、名前も「滝田卯夫」で間違いなかった。

こうして、遂に、初代校歌作曲者・滝田卯夫先生にたどり着くことができた。滝田卯夫先生は、昭和 6 年（1931）4 月 30 日に柳河高等女学校に着任し、昭和 22 年（1947）5 月 15 日に退任するまで、16 年間音楽教諭として勤務し、最後の肩書は「顧問」だったとのことであった。

滝田先生のことを文集で取り上げている女学生がいるらしく、温厚でとても優しい先生で、ピアノで流浪の民を弾いてくれるなど、滝田先生のおかげで楽しい学生生活を送ることができた、といったようなことを書いているらしい。伝習館高校同窓会事務局にお願いして、該当部分のコピーを送っていただけることとなった。

こうなると、また実家の母に聞いてみたくなる。「誰か柳河高等女学校卒の知り合いはおらんね？」と電話で聞くと、ご近所の〇〇さん、△△さん、と、スラスラと何人ものお名前が出てきた。普段の世間話でも、昔のことをすごく覚えておられるようで、皆様 80 代後半だが、もしかしたら滝田先生のこともご記憶にあるかも知れないと母はいう。母の人脈の広さと、最近のご高齢の方のお元気さ、記憶力には脱帽するしかなかった。

母は、母の実姉、つまり筆者の伯母に聞くと良いという。伯母の近藤澄江さん（旧姓：田中）は 60 年近く柳川に住んでおり、伯母のご主人の近藤正一さんは伝習館高校出身だから、きっと何かわかるのではないかとのことだった。そこで、2020 年 2 月 25 日（火）、伯母に久しぶりに電話し、滝田卯夫氏の情報提供をお願いした。すると、翌日の夜、伯母から電話があり、ご主人の近藤正一さんから、「僕は滝田先生に会ったことはないけれど、知っているよ」とのお話があったとのことだった。

近藤正一さんの姉の今村京子さん（現在 90 歳、旧姓：近藤、現在は久留米市在住）が、柳河高等女学校出身で、卒業後は柳河高等女学校の職員として一時期務めていたこともあり、滝田卯夫先生を知っているとのことであった。今村京子さんのお嬢さん（現在 70 歳くらい）も、幼稚園の時に滝田卯夫先生にピアノを習ったことがあるらしい。伯母を通じて、今村京子さんからいただいた滝田卯夫先生の思い出を以下に記す。

柳河高等女学校時代の滝田先生は、芸術家肌で、職員室でも人と交わらないタイプだった。優しい性格だが、人と群れるタイプではなかった。お子様はおらず、奥様と二人で暮らしていた。奥様も芸術家肌で、とっつきにくい感じがした。昭和 42 年（1967）時点の柳河高等女学校の同窓会名簿の旧職員欄には、山梨県韮崎市にお住まいである旨が書いてある。物故者欄には載っていなかったので、昭和 42 年（1967）、76 歳時点ではまだご存命だった模様。柳川市内の味噌店の女性（85 歳）は、小さい頃家にピアノがあったので教えに来てもらっていた。滝田先生はピアノがとっても上手で、柳川市内で子供にピアノを教えていた。

童謡や少女歌劇の作品が多く、きっと子供好きな優しい性格だったのではないかという私の想像は、概ねあたっていたようだ。4拍子の附設高校の幻の校歌を楽譜作成ソフトの音源で聴いたときに、少し女学生向けの曲調に感じたのも、16年間女学校に勤めていたことと関係があるのかも知れない。

また、国会図書館で調べた山梨県韮崎市の住宅地図では、昭和45年(1970)時点で既に違う方の住居になっているので、おそらく昭和42~45年頃にお亡くなりになったのであろう。現在の校歌作曲者である藪文人先生がお亡くなりになった時期(昭和44年6月)とほぼ同じである。ご冥福を祈る。

2020年3月7日(土)、伝習館高校同窓会事務局から、滝田卯夫先生のことを書いた生徒の文集の一部と、滝田卯夫先生の昭和16年(1941)頃のお写真のコピーが私の自宅宛に届いた。昭和16年(1941)頃ということは、滝田卯夫先生が50歳くらいの頃のお写真である。この時の柳河高女の校長は大石亀次郎先生で、大石先生は明治23年(1890)3月生まれなので51歳頃である。大石亀次郎先生の方が1学年上だが、滝田卯夫先生と概ね同世代だったようだ。お優しい感じで、同世代でもあり、大石亀次郎先生もきっと滝田先生には作曲を頼みやすかったに違いない。伝習館高校同窓会事務局からいただいた文集の一部と滝田先生のお写真を以下で紹介する。

<昭和九年(柳河高女34回卒)の方>

正面二階の講堂は、音楽教室でもありました。滝田卯夫先生の素晴らしいピアノ伴奏に感心しながら、椰子の実や流浪の民など、今でも大好きな歌を教わりました。先生のお優しさに甘えて、不心得な私達には結構な息抜きになって、楽しい時間でした。

二年生の頃、校風振興の歌が出来ました。柳川の葦、たちばな、青柳を詠みこんで、目指すべき乙女像を示された白秋先生の詞に、明るく躍動的なリズムの山田耕筰の曲、身も心も振り興された私達は、滝田先生の御指導で、「水の郷、水の郷…」と声を張り上げて歌いました。

<昭和十年(柳河高女35回卒)の方>

音楽の先生に瀧田先生がいらっしゃいます。一生忘れ得ない数々の歌を教えて頂きました。晩年を山梨県蓼科で過ごされました。



滝田卯夫先生(昭和16年頃)

蒲池中学校校長・本園清高先生からのお返事（滝田卯夫先生について）

2020年3月31日（火）、蒲池中学校事務局の方から電子メールの返事が届いた。添付ファイルを解凍すると、本園清高校長先生のお手紙が表示された。さすがに古い話で返事はないものと諦めていたのだが、お手紙の内容を拝見すると、この1ヶ月半の間、なんと様々な滝田先生縁のご年配の方々にヒアリングしてくれていたのだ。私は、見ず知らずの他校の卒業生の突然の依頼に、ここまで丁寧に調べていただいたことに、感謝の念と申し訳ない想いで一杯になり、即座にお礼のメールを返信した。

本園清高校長先生からのお返事は以下のとおりである。

丸山様

校長の本園と申します。

さて、ご依頼の滝田先生に関し、分かります範囲でご回答いたします。

滝田卯夫さん

明治24. 9. 30生まれ 山梨県

大正2年 東京音楽学校専科

大正5年 同聴講科

昭和3年 柳川高等女学校

昭和21年 退職 55歳

その後、柳川市や近辺の中学校や高校で講師をなされた。

昭和23年 柳川市立蒲池中学校 校歌作曲 本校在職で。

（教わったという年代の方にうかがいました）

余録

作詞は、本校区居住の大坪都築さん。戦後戦地から戻られ、本校で勤務。両者の作品が本校校歌となります。

大坪さんは、退職され、文化放送に入社。安部公房とラジオドラマ制作に励まれた。

数年後、県立山門高校の講師としてご異動された。

（教わったという年代の方にうかがいました）

柳川市内から通われていた。

（教わったという年代の方にうかがいました）

昭和32年 みやま市立山川東部小学校校歌作曲

（この小学校は再編により現在ありません。最後の校長先生におたずねしましたが、ご本人についてはご存じではありませんでした）

山門高校に確認・・・記録なし

柳川市の電話帳に「滝田」姓の登録なし。

※ 以上のことしか、つかめませんでした。
分かったことをお知らせします。

2020. 3. 31

柳川市立蒲池中学校

校長 本園 清高

中村八大氏の自伝にみる藪文人先生の思い出

37 回生同期の永江雅和君から、中村八大氏の自伝「ぼく達はこの星で出会った」に、藪文人先生との思い出が詳しく書かれているとの情報が寄せられた。読んでみると、藪文人先生はもちろん、石橋幹一郎氏や本間四郎氏の他、板野先生というお名前も出てくる。藪文人先生と一緒に、藪淑子さんの広島のご実家まで博之さんとの結婚の許しを願いに同行してくれた「バンノ」先生であろうか。

以下、中村八大氏の著書の一節をご紹介します。

音楽はどれもが観客とともに

昭和 21 年（1946）ごろは、まだ学制切り替えの前で、中学明善校と久留米高等女学校とは隣合わせにありながら、両校の交流はほとんどなかった。

そんな中で新しくできた大量のクラブ活動だけは、徐々に両校の交流を少しずつ進めていったが、中でもささやかに出発したイガグリ頭の十人足らずの明善校の合唱団は、連日の練習のかいがあつて隣の久留米高女の音楽の藪先生に認められ、やがては久留米高女との大混声合唱団にまで発展していった。

我々は大手を振って久留米高女の音楽室まで練習に出かけられるのだが、他の学生たちにうらやましがられ、何だかだとラブレターの手伝いをずいぶんやらされたものだ。（中略）

私自身は、ピアノを藪先生と福岡の佐藤博子先生に見てもらおうようになり、音楽の専門の勉強に身を入れながらも、久留米の風土というのか、私自身の性癖というのか、久留米周辺をあてもなくぶらぶらと歩き廻るのが好きだった。（中略）

ある日、ブリヂストンの軽音楽団にピアノ弾きが足りないからと誘いがきた。ヴァイオリン、チェロ、アコーディオン等々、不思議な楽団だったが、そのヴァイオリンが明善校の板野先生だったり、アコーディオンが、ブリヂストンの石橋幹一郎さんだったりして、タンゴ等を毎日演奏して楽しんだ。

また花畑の家から裏をのぞくとピアノの音の聞こえる家があり、お互いに塀越しに目と目を見合つて友だちになったのが、久留米音協合唱団の指揮で大活躍の本間四郎さんで、戦後の小さな音の流れが、いまでは大きな渦をまいて久留米中が立派な音楽都市、文化都市として成長しているのを目のあたりになると、とても大きな感動を感じる。

作詞者 大石亀次郎先生

附設高校の校歌を作詞し、滝田卯夫先生や藪文人先生に作曲を依頼したのは、附設高校草創期の漢文教師、大石亀次郎先生である。附設高校開校 2 年目の昭和 26 年（1951）5 月頃に校歌を作詞されている

る。ここでは、大石亀次郎先生の自伝「教壇五十年」(1965)を参照し、附設高校着任までの大石先生の足跡を振り返ってみたい。

明治23年(1890)3月、佐賀県三養基郡旭村で生まれる。明治37年(1904)、県立明善中学に入学するが、2年生の時、亀次郎氏の兄が父親に「小学校から首席で通してきた亀次郎を教育家にしてあげたい」と懇願し、本人もその気になり佐賀県師範学校に入学しようとする。

ところが年齢が二歳足りなかったので、明治39年(1906)、戸籍が間違っていたことにして、罰金を払って明治21年(1888)生まれに訂正し、佐賀県師範学校に入学する。明治43年(1910)鳥栖尋常高等小学校訓導となり、大正2年(1913)3月、同僚の大石モモエ(久留米高等女学校卒で亀次郎氏より6歳年下)と結婚する。大石家の婿養子となり、皆良田亀次郎から大石亀次郎となる。

大石モモエの母の妹婿吉田釧太郎はブリヂストン社長の石橋正二郎(後に久留米大学理事長として、現在の附設高校がある正源寺の山を無償で附設高校に寄贈)の叔父であるなど、大石家の親族は名士が多く、大石家では亀次郎氏を教養して親類と肩を並べさせたいという希望があった。妻のモモエも東京遊学を勧めていたが、亀次郎は師範学校に通うために実父が借金をしており、遊学すると返済ができなくなるため悩んでいた。事情を知った養父が借金を立て替えてくれたことで、大正5年(1916)、東京遊学を実行に移し、妻子を置いて東京に出る。

東京市立金曾木尋常小学校勤務からスタートし、大正6年(1917)9月には私立暁星小学校勤務となる。暁星小学校では、夏目漱石の長男・次男、与謝野鉄幹の息子、後の市川團十郎など、ブルジョワ層の子弟たちを多く教える。小学校教師として勤務する一方で自らも勉学に励み、大正8年(1919)に国語伝習所を卒業、大正9年(1920)に二松学舎を修了し、國學院大学高等師範部国漢科に入学。同時に夜は東京市立大正尋常夜学校で勤務している。これらの努力が実を結び、同年12月に師範学校、中学校、高等女学校教員試験検定に合格。大正10年(1921)3月には國學院の大学院友に推薦され、養父母を東京に呼び寄せ、日光・鎌倉巡りをしている。

大正10年(1921)4月、福岡県中学明善校教諭として着任し、昭和5年(1930)4月には教頭となる。昭和6年(1931)9月、現在の野菜試験場あたりで明善と南筑の生徒が決闘を始めようとしていたところに連絡を受けて急行し、矛を取めさせて収束させている。附設高校着任後は、その決闘の地の丘で時々漢文の授業をしたらしい。昭和7~8年(1932~33)には、私費を投じて鳥栖神辺地区の道路拡張工事を行っている。丸山豊氏(附設後援会長、詩人、医者)、石橋幹一郎氏(ブリヂストン社長)は明善時代の教え子である。



明善校時代の大石亀次郎先生

昭和 11 年 (1936) 4 月、福岡県柳河高等女学校長となる。女学校で女子生徒が怖がらないように、頬髯と顎髯を剃ったことが、「涙の髯物語」という見出しで地元の柳河新報に掲載された。柳河高女時代は、北原白秋を迎え、叙事詩「海道東征」を聴衆に披露しているほか、校長会で上京した際は菊池寛と面談している。柳河高等女学校を去る日は、滝田卯夫先生のピアノ伴奏で送別の歌が合唱されたのは、前述のとおりである。

昭和 18 年 (1943) 4 月に福岡県三潴中学校長となり、終戦を迎える。昭和 21 年 (1946) 3 月に三潴中学校を依願退職し、昭和 22 年 (1947) 4 月、公選により佐賀県田代町長に就任するが、11 月に病氣退職。三潴中学退職の退職金はなく、恩給は僅か、貯金は封鎖され、平価切下げで金の値打ちがなくなり、農地解放で小作米も来なくなるという厳しい状況となる。

ご家族の生活を支えるため、還暦を前にして、「扶養もおぼつかないが苦衷を打ち明ける場もなし、おくびにも弱音は出し度くない。正義の戦いはこれからだ。」と、公私転々と、様々な働き口を求めて回る。明善時代の教え子と共に 1 か月間生命保険の外交員をしたり、久留米学芸大学新教育研究会勤務、ブリヂストン旭工場美術講師を経た後、明善高校の夜間部にちょうど欠員が出たことを知り、昭和 24 年 (1949) 11 月、新制明善高等学校勤務となる。

昭和 25 年 (1950) 3 月の末、二人の男が大石亀次郎氏の自宅に突然現れる。一人は附設高校の初代校長となる板垣政参博士、もう一人は元明善校長で後に附設高校の副校長となる檜崎広之助氏である。

戦後、六三三四の新しい教育制度の確立に応じて、当時の久留米医科大学は、医学部・商学部からなる総合大学として、かつ、小学校から大学に及ぶ一大学園建設を志向し、その第一着手として附設高等学校の創設を図り、昭和 25 年 (1950) 2 月 27 日、久留米大学附設高等学校設立が認可されていた。ちなみに、設立趣意書には、「ここに於て、一步をすすめて大学教育の基礎を培おうとする学園内部 (久留米大学のこと) の要求と、九州私学の権威としての本学園に対する世論の期待とに於て、今度特色ある新制高等学校を附設しようとするものである。」と記されている。

板垣政参、檜崎広之助の両名が、「人物の薫陶は此の機にある。国家有用の人物養成の為に高等学校が誕生した。ついでには育英壇上に出馬せよ。」と大石亀次郎先生に迫った。大石亀次郎先生は、「時局を憂い、道德教育の緊急と重要性とを痛感する鼎座の談議に、時のたつのを覚えなかった。遂に御一泊。両先生の熱意と知遇とに対して私は、一晚熟慮の上、翌朝就任を受諸天下の英才を得て国家奉公の任に当たることにふみきったのであった。」と「教壇五十年」に記している。

かくして、昭和 25 年（1950）4 月、大石亀次郎先生は、新設された久留米大学附設高等学校常任講師となった。附設高校は、昭和 25 年（1950）4 月 8 日、工兵隊当時の機会庫の 2 階で、同年に発足した商学部が大講堂としていた教室で入学式を挙行し、102 名が入学した。当日は朝から暴風雨だった。

大石亀次郎先生は、その後昭和 43 年（1968）3 月に退職するまで、18 年間草創期の附設高校で教鞭をとられたのであった。



昭和 35 年（1960）頃の大石亀次郎先生

附設高校運動会ストーム吟詠（昭和 35 年（1960）9 月）

大石先生亀次郎先生が歌詞に込めた想い

附設校歌の歌詞は、文語調で難しい。70周年を機に、口語訳してみたらどうかと思っていたら、今から半世紀近くも前に、大石亀次郎先生自らが、「附設高等学校二十五年史」に、「附高校歌解」という解説を寄稿されておられた。

敗戦後の荒れた世相の中で、国家・社会に貢献しうる誠実にして気概ある人物の育成を目指す建学の精神が熱く込められた歌詞である。「附高校歌解」を以下にご紹介する。

附高校歌解		大石亀次郎
(一) 高良山下の学園に 萬朶の桜咲き揃い 若き血潮の高鳴るを 見ずや希望の揺籃地	九州の名山の下、環境のすぐれたこの学校に 枝一杯に美しい花（粒揃いの秀才は集った） 意気高く理想に燃ゆる我々青年の この揺りかごで育ち行く我々の雄々しき姿を見て居て下さいよ。	
(二) 江月冴えて悠久の 流れは遠し千歳川 高き彼岸の光明を 見ずや試練の理想郷	月光は皎々と冴えて水面を照らす 永遠に盡きせぬ千歳の川の不休の姿 その燦たる月色輝く光明を逐うて日夕研く この鍛錬努力の理想境に我々の奮闘を見て下さいよ	
(三) 修羅道の世を救ふべく 平和の偉業任として 築く不朽の真善美 見ずや我等の大使命	汚濁争乱の人の世を救うために 平和幸福の建設この大事業こそ我々の任務だと自覚して 學術の真理、道徳の至善、芸術の審美 之を不朽に築いて行く覚悟と我々がこの大任務の遂行とを 見守って居て頂き度い	

町田健校長先生・合唱部顧問兼行孝幸先生へのお願い

時期は少し遡るが、2020年2月19日（水）、私は10月の東京支部同窓会に来賓としてご出席をご快諾いただいている町田健校長先生に、お願いのメールを送った。私の在学中には附設高校には合唱部は無かったが、今は混声の合唱部があり、しかも今年8月に高知で開催される全国大会に福岡県代表として出場することを知り、70周年記念の同窓会を校歌で祝うのに、ぜひ協力をお願いできないかと考えたのである。町田健校長先生にご相談した内容は以下のとおりである。

<前略>

10月の東京支部総会の企画は、学校にできるだけご迷惑をおかけしないように進めていきたいと考えております。

一方で、附設高校の合唱部は、今年8月に高知で開催される全国大会に出場される

ほどの高いレベルと伺っており、「校歌」を軸とするからには、是非とも現役附設生のご協力を仰げないかと考えております。東京在住のOBも皆喜ぶと思っています。

具体的には、以下のような企画を検討しており、1と2について、合唱部顧問の先生にご相談することを許可頂けると幸いです。

<検討中の案>

1. 附設高校合唱部の8月の全国大会での演奏の動画を、10月同窓会会場で放映する
2. 滝田卯夫作曲の初代校歌(※)を、70年ぶりに現役合唱部員に歌ってもらい、その演奏の動画を、10月同窓会会場で放映する。
※昭和26年5月30日から、現在の藪文人先生作曲の3拍子の曲に代わる昭和26年6月22日まで存在した、4拍子の幻の校歌。
卒業生たちに、幻の校歌があったことを披露し、70年の歩みを振り返る。
3. 現在の校歌作曲者である藪文人先生の遺族である藪淑子先生(86歳)に、藪文人先生の思い出を語って頂き、義父が作曲された校歌の東京支部300人での大合唱を聴いて頂く。
(藪淑子さんは東京支部総会に来ていただける予定で、校歌を聴くのを楽しみにしておられます)

<以下略>

町田健校長先生からは、即日、合唱部員に校歌を歌ってもらうことについて、合唱部顧問の兼行孝幸先生の了解を得た旨と、兼行孝幸先生と直接連絡を取ってもらって構わない旨のお返事をいただいた。

翌2月20日(木)、早速兼行先生にメールでご相談したところ、動画・画像は大会規定の厳しい制約や情報保護の観点から、卒業生への披露時にSNS拡散防止対策の必要があるものの、現役合唱部員による演奏自体はご快諾いただくことができ、滝田卯夫先生作曲の4拍子の楽譜を兼行先生にお送りした。

これで70年振りに初代校歌が蘇り、卒業生に聴いてもらうことができる、そして、藪淑子先生にも、東京で、藪文人先生作曲の3拍子の校歌の大合唱を聴いていただくことができる！

70周年という節目の年だったことや、校歌自体が持つ魅力のおかげもあると思われるが、ご多忙の中、卒業生からのわがままなお願いをご快諾いただいた町田健校長先生と兼行孝幸先生には、感謝の言葉しか見つからなかった。

田村徹先生による校歌の補作

2020年3月8日(日)、10回生の古賀暉人先輩から、ゆうパックが届いた。新たな参考資料をお送りくださるとのありがたいお話をいただいていたもので、中を開けてみると、本間一郎氏の生涯に関する伝記や新聞記事など、校歌のルーツ調査の参考になる貴重な資料が入っていた。

例によって貪り読んだ私は、本間家の伝記を通じて、附設高校の礎を築いた板垣政参先生、大石亀次郎先生、本間家一族のみなさま、藪文人先生、丸山豊氏といった方々の深いご関係や時代背景について理解を深めることができた。

また、これらの資料と併せて、田村徹先生が補作された校歌楽譜のコピーもお送りいただいた。B4縦4枚に丁寧に手書きで書かれており、藪文人先生の原曲が、明治初期の唱歌にみられる、いわゆる5音階の「よ、な抜き旋法」で作られている旨の解説も加えられていた。

現在の附設高校が男女共学であることも考慮されたのか、混声三部合唱で作られており、混声四部とすることもできる旨が付記されていた。右上のクレジットには、「作詞 大石亀次郎 作曲 藪文人 補作 田村徹」と書かれている。

田村徹先生と電話でお話させていただいた時にも補作についてお話されておられたが、これには、所々間違いのある復元楽譜を看過することはできないといった、作曲家としての矜持を感じた。高校時代の恩師が作曲した校歌の原譜が不幸にも無くなってしまい、復元も道半ばだった訳で、恩師の校歌をしっかりと作り直したい想いはなおさらであったと思われる。

ピアノを自ら弾ければ良いのだが、そうした素養の無い私は、例によって、高校生の娘に頼んで楽譜作成ソフトに田村徹先生の楽譜を打ち込んでもらい、それを聴くことにした。

「こうらんかーのー、がーくえんにー」と、今回も娘は歌いながらパソコンに音符を打ち込んでいく。すっかり娘も附設の校歌を覚えてしまった。「わー、混声だ。テナーがここでこういう風に入ってくるのね。いいなー。おもしろーい。」と、とても楽しそうである。

出来上がった音源を早速聴かせてもらった。躍動的な混声三部で、各パートがユニゾンではなく別に動く箇所もあり、彩が豊かで、最後がオクターブ上で終わるところには末広がり感がある。男女共学の時代にふさわしい、未来感のある編曲に感じた。

勝手な思い込みだが、田村徹先生は、かつて明善高校で厳しく指導された藪文人先生に対し、楽譜を通じて、「藪先生、附設高校では楽譜が無くなったと聞きました。私が補作しましたがいかがでしょうか」と、約70年の時を超えて、藪先生との会話を楽しんでおられるに違いないと思った。

後日、合唱部顧問の兼行孝幸先生に、田村徹先生が編曲された混声三部合唱の校歌についても、附設高校合唱部のみなさまに歌って欲しい旨お願いしたところ、こちらもご快諾いただいた。8月4日に高知で行われる全国大会に向けて、期末テストが終わった7月末頃に、1月に引退した3年生も含めてホール練習を行う予定なので、その場で録音して構わないとのことであった。

4拍子の幻の初代校歌の70年ぶりの演奏に加え、田村徹先生の藪文人先生に対する返礼歌ともいべき、混声三部の3拍子の校歌が、現役附設生によって演奏される！

7月末には何が何でも休暇を取って久留米に行き、歴史的瞬間の録音に立ち会うぞと、思いを新たにしました。2020年3月初旬の時点では、小中学校の一斉休校も始まったが、夏になれば新型コロナウイルスも弱まるのではないかといった社会の雰囲気もあり、一抹の不安を感じてはいたが、8月の高知での全国大会も、10月10日の東京支部同窓会も、中止のイメージまでは持てていなかった。



田村徹先生による補作の楽譜の一部

恩師の皆様へのヒアリングと西原和美先生からのご返信

2020年2月1日(土)に校歌のルーツの調査を開始してから、約1ヶ月半、作詞者大石亀次郎先生、作曲者藪文人先生、滝田卯夫先生を探し求めることで、様々なことが判明し、改めて附設高校草創期の設立者や関係者たちの思いなど、母校や校歌への理解を深めることができた。

しかし、なぜ校歌制定からわずか三週間で、滝田卯夫先生の曲から藪文人先生の曲に変更になったかは、文献のどこにも書いておらず、草創期の回生の先輩方に聞いても、なかなかご存知の方が見つからない。そこで、かつての恩師たちに、校歌の曲改定の経緯について、ダメもとで聞いてみることにした。

3月初め、まずは、中学時代の担任だった国語の田中博先生の御自宅に電話をしてみた。すると、いきなり田中博先生ご本人が電話に出られ、昔の授業での「短文コンテスト」や「一句コール」の時と変わらない張りのある声、はっきりしたかくしゃくとした口調に驚いた。

「田中先生、失礼ですが、今おいくつになられましたでしょうか?」「90歳です。」といった、約35年振りに直接お話するにとしては本当に失礼なやりとりの後(反省)、校歌の改定の経緯を御存じないか、大石亀次郎先生や世良忠彦先生から直接お話を伺ったことはないかを尋ねた。

すると田中博先生は、「私の附設への赴任は昭和47年(1972)と、創立からだいぶ後で、大石亀次郎先生のご退任後だったので、草創期のことはあまり存じ上げておらず、世良忠彦先生からも、特に校歌

の曲改定について聞いたことはありませんでした。古田哲先生ならばご存知じゃないですかね。」とご回答された。

古田哲先生が平成 30 年（2018）にお亡くなりになったことを伝えると、田中博先生はご存知なかったようで、とても残念そうであった。曲改定の経緯は判明しなかったが、田中博先生のお元気そうなお声を約 35 年振りに聞くことができ、本当に嬉しく思った。

続いて、10 月東京支部同窓会に来賓で来ていただけることになっている保健の田中真弓先生にも、電話で聞いてみたが、特に校歌の曲改定の経緯についてはご存じないとのことであった。

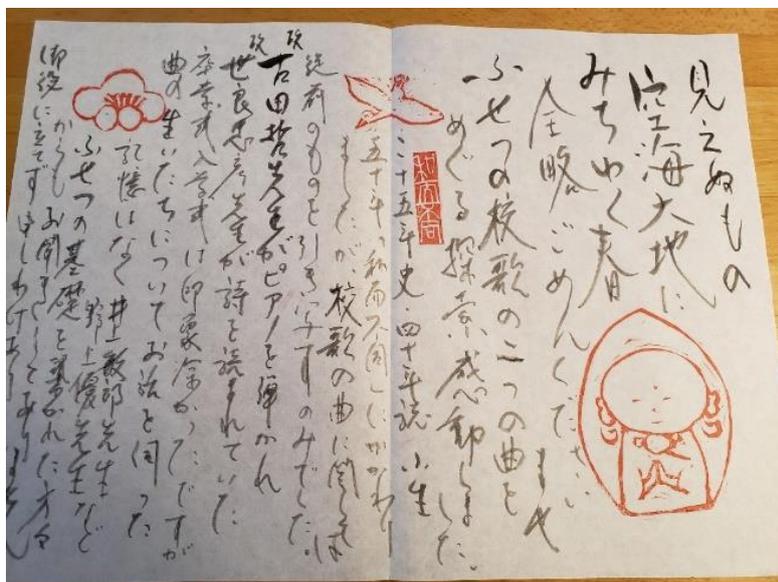
ならば、附設高校の事務局に、昭和 20 年代の古い職員会議の議事録などが残っていないか、同じく 10 月に東京支部同窓会に来ていただけることになっている数学の郡豊先生に、メールと電話で質問してみたが、郡先生からは、さすがにそんなに古い資料は知らないなあ、とのことであった。

草創期の職員・生徒の文芸集「ふよう」のバックナンバー全巻が附設高校の図書館にあるかどうかだけでも確認できないかと郡豊先生に尋ねたところ、それであれば、図書館長だった国語の西原和美先生に聞いてみたら、何かわかるのではないかとアドバイスをいただいた。

2020 年 3 月半ば、西原和美先生に、それまで調査で判明した校歌のルーツに関する資料とセットで、校歌の曲改定に関する経緯をご存じないか、ご自宅に手紙をお送りした。すると、3 月 25 日、西原和美先生から、高校生時代に現代国語の授業などで時々いただいたお地蔵さんのイラスト入りの御朱印などと全く同じ、実に見事な達筆のお手紙と、最近の文芸誌への投稿を特集したお手製の冊子をいただいた。

残念ながら、曲変更の経緯は西原和美先生もご存知なかったが、もはやお手紙を超えて芸術作品ともいうべき、西原和美先生からのご返信を紹介させていただきたい。

<西原和美先生のご返信の画像（一部）>



<西原和美先生からのご返信>

見えぬもの 空海大地にみちゆく春 全略 ごめんくださいませ
ふせつの校歌の二つの曲をめぐる探索 感動しました。
二十五年史、四十年誌、小生 五十年「和而不同」にかかわりましたが、
校歌の曲に関しては従前のものを引き写すのみでした。
故古田哲先生がピアノを弾かれ 故世良忠彦先生が詩を読まれていた
卒業式入学式は印象深かったのですが曲の生い立ちについてお話を伺った
記憶はなく井上敏郎先生 野上優先生などからもお聞きしておりません。
お役に立てず申しわけありません 草々

別冊の冥土 in Japan の土産をもって余生に入りました
おわびかたがた皆様様の御自愛御祈申上候

藪文人先生と、若き日の古田哲先生の接点

新型コロナウイルスの猛威は収まることを知らず、2020年4月7日（火）、政府は遂に緊急事態宣言を発令した。会社の仕事も週3～4日は在宅勤務となっていた4月半ば、本間敬二先生から、2月に質問させていただいた事項へのご回答と参考資料を郵送でいただいた。本間敬二先生には、2月の時点で、藪文人先生に関する情報について、いくつかご質問をさせていただいており、その調査結果を多数ご提供いただいたのである。

藪文人先生の葬儀の式次第など、そのうちの多くは既に参考資料として前述の項に記載させていただいているが、古田哲先生に関していただいた情報について、ここでご紹介する。

本間敬二先生には、「久留米市史という文献に、『アリオンコールの初代指揮者は古田哲が務めた』との記載があったが、私が附設高校在学時に、音楽が好きなご年配の数学の先生がいらっしゃって、名前が『古田哲』でした。同一人物でしょうか。」との質問をさせていただいており、以下のお返事をいただいた。

たぶん同一人物で間違いないと思う・・・と確認した方々は口にしますが、100%の答えまでたどり着きませんでした。アリオンコールは昭和25年（1950）から30年（1955）までの5年間の活動だったため、いまは正確な情報を持ち得ている方が見つかりません。ただ、私の持っている本に当時の古田哲氏の写真が掲載されていますので、写しを同封いたします。丸山様の記憶と結びつきますか？



本間敬二先生からいただいた古田哲先生の写真
（アリオンコール指揮者時代）

写真を拝見した瞬間、私は 120%ご本人と確信した。髪型以外は、私が数学を習った古田哲先生とお顔が全く同じである。今にでも数学の授業が始まりそうな感じだ。

5月末、2月の久留米OB会でご一緒させていただいた23回生の古賀善彦さんから、古田哲先生のご長男の古田斗志也さん(22回生)と同じ病院に勤務しているの、校歌のことなど色々聞いてみましょう、との有難いメールをいただいた。そこで古賀善彦さんを通じて古田斗志也さんに、古田哲先生が若い頃、アリオンコールという合唱団で指揮者をしていなかったか聞いていただいたところ、「大学時代にグリークラブに入っていたとは思いますが、詳しいことは知らない」、とのご回答であった。まだ100%の確証にはいたらないが、同一人物である可能性は極めて高いと思った。

8月末、22回生の中村尚昭さんから、「22回生には、古田哲先生の末弟の古田司さんも在籍しているので、お話を聞いてみたらどうか」とアドバイスをいただいた。そこで、古田哲先生が、アリオンコールの初代指揮者だったかどうかを中村尚昭さんを通じて古田司さんに聞いていただいたところ、ご本人で間違いのないとのことであり、ここで100%の確証にいたることができた。

大石亀次郎先生が附設の校歌を作詞し、既に柳河高等女学校を退職していた滝田卯夫先生に校歌の作曲を依頼していた昭和25~26年(1950~1951)頃は、一方では、附設校歌作曲者の藪文人先生が「久留米音楽協会合唱団」を設立し、そこに若き日の古田哲先生が入団し、さらにはスピノフして「アリオンコール」を立ち上げ、初代指揮者になられたということである。戦後の動乱期の久留米音楽業界で、これらのメンバーが顔を合わせたことも、もしかしたらあったのかも知れない。

ちょうど校歌が作曲された昭和26年に、藪文人先生と合唱団を通じて接点があった古田哲先生であれば、大石亀次郎先生が藪文人先生に校歌作曲を依頼した経緯や校歌の曲変更の経緯をご存じだった可能性があり、もうお話が聞けないのが何とも悔やまれる。

<参考1>本間敬二先生からいただいた昭和20~30年代の久留米の合唱団情報(2020年4月)

■久留米音楽協会合唱団

久留米音楽協会を設立した藪文人は久留米高女学校の教え子を組織して小笹合唱団なる女声合唱団を作っていたが、これに久医大、久高専の学生を主体とする男声を加え昭和24年2月「久留米音楽協会合唱団」を設立した。(中略)

昭和24年12月、第1回発表会を明善校講堂で行った。昭和25年一部の人が分離してアリオンコールをつくり、久留米の合唱界は二分したが、本会は藪氏を中心に活動を続け数回の演奏会、ラジオ放送を行った。

昭和27年、名称を「久留米合唱団」と改め発展的解消をとげた。

■アリオンコール

新しいスタイルの合唱団への情熱から久留米音楽協会合唱団を分離した古田哲、藤吉彬翁等は久留米在住の九州帝国大学の学生約15名を中心に事務員、学生の女声を加えて新合唱団の結成へ踏み切った。

最初の練習は昭和25年8月20日、筑邦女子高校で藤吉盛人、藤原輝男、堀文昭等20余名参集し

て行われた。これが事実上の創立である。

アリオンの名付け親であり初代指揮者古田哲は機関紙で次のようにかいている。ギリシャ神話にでてくる音楽家であるアリオンは、コリントス王ペリアンドロスに答えて云いました。「神から与えられた才能で他の人をもよろこばせたいのです」。若い世代の抱負と情熱が感ぜられます。

強行猛練習に正月も歌いつづけたメンバーは昭和 26 年 2 月 18 日、南薫校で最初の公演「送別演奏会」を開き、更に同年 12 月 23 日には第 1 回発表会を明善校講堂で開催した。指揮古田哲。曲目は「メサイヤ」(ヘンデル) 第一部全曲にアメン・コーラス、ハレルヤ・コーラス等であった。出演者約 50 名。この発表会の準備金捻出には大変苦勞し水天宮春大祭(5 月)に全メンバーが造花を販売するなど楽しい努力が払われた由である。

昭和 26 年末、病弱のため古田氏は指揮者の地位を退き、代わって傍示暁了(かたみあきら)が新指揮者となった。(中略)

然し昭和 30 年までに男声の中心をなしていた九大の傍示、布江、弥永、藤吉、稲益、藤原等が逐次卒業して社会に巣立ち更に九州第二分校が移転したため混声合唱団としての形をとることが困難となり、同年 4 月、休団し実質的解散となった。

<参考 2>古田司さん(22 回生)からいただいた古田哲先生のお話(2020 年 8 月末~9 月初旬)

- ・(私は)古田哲先生と 30 歳離れた弟になります。(異母兄弟です。)つまり、私が生まれたときは、古田先生は 30 歳になりますので、私ができる範囲でお答えします。
- ・古田哲先生は、大正 14 年(1925)8 月 31 日生まれです。
- ・射撃訓練の時に、銃が暴発して左の耳がほとんど聞こえないようになったと言っていました。
- ・体が強く無かったので、徴兵検査は不合格だったと言っていました。
- ・九州大学農学部卒業(卒業年度は不明)
- ・昭和 38 年(1963)4 月に附設高校に着任する前は、西鉄久留米の近くの筑邦女子高校勤務。
- ・アリオンコールの初代指揮者となった昭和 25 年(1950)は、既に社会人だったと思われま。
- ・古田先生が亡くなる 10 年前から、古田先生と次兄と私で、月に 1 回の食事会、年に 1 回の旅行をしていました。その時に、古田先生が言っていたことをすこし思い出しましたので報告します。
- ・22 回生の本間友基君の叔父さんである本間四郎さん(本間外科前院長)が、久留米音協に所属されていた時に、古田先生がアリオンコールを設立したのではないかと想像します。
- ・古田先生が、良きライバルと言っていましたし、本間四郎先生が亡くなった後に自宅までお参りに行って、奥様とお話をしたと言っていたのを記憶しています。
- ・それと、附設の校歌については、校歌には珍しいワルツ調の 3 拍子と言っていました
- ・写真は間違いなく古田先生の若い時の写真です。貴重なものをありがとうございました。
- ・古田先生より、「附設高等学校二十五年史」と「附設高校 50 周年、中学校 30 周年」を以前、いただいていたのを思い出しまして簡単に読みました。丸山さんのところにも、2 冊ともあるかもしれませんが、二十五年史の p 35 に、校歌の作詞者である大石亀次郎先生による附設高校の校歌の解説が掲載されています。
- ・古田先生に関しては、目次の前に世良校長作詞、古田先生作曲の「25 周年祝歌 ふるさとに時はきらめく」p 376 に世良校長作詞、古田先生作曲の「附設詠唱」が掲載されています。
- ・古田先生は、附設の寮歌、佐賀県の東明館高校に関する歌などを作曲しています。

大石亀次郎先生のご子息・お孫さんとの会話

新型コロナウイルスの感染状況がいったん終息に近づき、緊急事態宣言は2020年5月25日(月)に解除されたが、秋の第二波の懸念が払しょくできないことから、同窓会東京支部役員での論議の結果、10月10日東京支部同窓会・懇親会の中止が正式に決まり、5月末、同窓会本部にも中止が承認された。

非常に残念な結果となったが、感染が止まらず有効なワクチンも開発されていない中ではやむを得ない決定であり、来賓の町田健校長先生、白水孝典教頭先生、森上芳樹先生、郡豊先生、田中真弓先生にお詫びのご連絡をし、会場のキャンセル手続をすすめた他、昭和63年(1988)にFBS福岡放送オキノンカTVの取材で附設高校に来ていただいたご縁で司会をご快諾いただいていた堤信子アナウンサーへのお詫びなど、中止対応に追われることとなった。ただ、同窓会報は冬に発行することとなり、校歌に関する調査も掲載してもらえることとなった。

藪淑子先生にも電話で10月同窓会中止のお詫びをし、「このコロナの状況ではやむを得ないですね」とご理解いただき、労いのお言葉をいただいた。

附設高校合唱部の兼行孝幸先生にも同窓会中止の旨をお伝えした。一方で、附設高校合唱部員による校歌の演奏だけは、同窓会ホームページ等を通じて、ぜひ音源を附設高校の卒業生に伝えたいので、何とか演奏・収録をお願いしたい旨をお伝えしたところ、ご了承いただくことができた。

一方、新型コロナウイルスの影響で、附設高校では入学式も6月までできず、生徒の登校もままならない状況が続いていた。また、合唱は3密になりやすく感染リスクが高いということで、部活動も満足にできない状況となっているらしい。8月4日の高知での全国大会も中止となり、各校が動画を提出することで対応することとなったようだ。

このように、新型コロナウイルスは、様々な所に大きな影響を及ぼしていた。オンライン授業用のタブレット端末をレンタルしたり、通学用にバスをチャーターするなど、母校の費用支出も色々発生して負担になっているらしい。こうした窮状を聞くに及び、同窓会活動も、母校支援を全面に打ち出して、7~8月以降、寄付金依頼などを始めることにした。

そうした中、校歌の曲改定の経緯が何とかしてわからないかと考えていたところ、大石亀次郎先生の著書「教壇五十年」に、久留米大学医学部の医師である大石亀次郎先生のご子息、大石弘之さんが一筆寄稿されていたことを思い出した。「教壇五十年」に記載の年表によれば、大石亀次郎先生が校歌を作詞したと考えられる昭和26年(1951)は、弘之氏は高校生であり、校歌の曲変更の経緯について何かご自宅で聞かれたことがあるかも知れない。

私は、久留米医大額医学部同窓会事務局に電話し、大石弘之先生の勤務先のクリニックの電話番号を教えてもらい、その電話番号に電話してみた。しかし、なぜか電話が繋がらない。

その後しばらくして、6月下旬、久留米大学医学部の2013年頃の同窓会報に、大石弘之先生がお嬢様の駒井礼子さんと親子で同窓会に出席している記事をネットで見つけた。そこで、鳥栖の駒井あやこ

クリニックの受付の方に電話し、駒井院長先生に、私が附設高校校歌のルーツを調査していて、大石弘之先生とコンタクトを取りたい旨の伝言をお願いした。

すると、数日後の6月25日の朝、駒井礼子先生から筆者の携帯電話にお電話があり、大石弘之先生のご連絡先を教えていただくことができた。昼にその電話番号に電話をすると、遂に大石弘之先生ご本人にお話を伺うことができた。

電話でご質問したところ、残念ながら、大石弘之先生も附設校歌の曲改定の理由はご存じないとのことであったが、20分ほどお話をさせていただき、大石亀次郎先生との思い出を伺い、そのお話に深く感銘を受けた。大石弘之先生のお話について、以下ご紹介する。

「附設高校の校歌の曲が変わったというのはいつ頃の話ですか。昭和26年5月から6月にかけてですか。そうですね、私が高校生の時ですね。うーん、残念ながら、父（大石亀次郎先生）からその辺りの話は聞いたことはなかったですね。」

「私はその頃は明善高校に通っていて、生徒数が非常に多い学校だったので、クラスメート以外はちょっと覚えていないですね。中村八大さんの名は耳にしたことはありましたが。え、藪文人先生ですか。藪先生は覚えていますよ。柳河高等女学校の滝田卯夫先生は存じ上げないですね。」

「父（大石亀次郎先生）のことを思い出したのは本当に久しぶりです。私は今のこの場所（田代）に家を建てて、父が死ぬまで20年一緒に暮らしました。大石クリニックという病院をここでやっておりましたが、今は閉鎖しております。」（電話がつながらなかった理由がこれで判明した）

「父（大石亀次郎先生）は、最期は私の膝の上で亡くなりました。丸山さんは『つなぐ』というテレビドラマをご覧になったことがありますか。頭のうしろのてぬぐいがすーっと消えていくような感じですか。私は、父が冷たくなるまで膝の上で抱き続けていました。満足な別れをしました。」

「死んで4日後の真昼間、親父が私の目の前に現れてこう言いました。『一緒に風呂に入れてくれて嬉しかったぞ。ありがとう。』」

「（大石亀次郎先生が夢枕に立たれたのですかととの問いに対し、）いや、私には父が見えたのです。昔はそうした霊的なものが見える能力があったのです。今はなくなってしまいましたけどね。あの時は嬉しかった。」

こんな会話を交わし、同窓会報が冬に発行されたらお送りする旨を話すと、とても楽しみにしている、とのお言葉をいただいた。

その後、2020年7月1日（水）に、大石弘之先生のご長男（大石亀次郎先生のご令孫、駒井礼子先生のご令弟）である大石正仁さんからお電話をいただき、幼い頃に祖父（大石亀次郎先生）から、明善や柳川など、藩校の伝統を継ぐ学校で校長などを務めていたこと、附設高校の草創期は優秀な講師を方々からかき集め、自分も声がかかり、礎を築くのに尽力したこと、学校から校歌の石碑（注）の作成を頼

まれ、自ら筆を取った石碑が校内に設置されていることなどを聞いたと教えていただくことができた。

(注) 校歌碑は、昭和 58 年 (1983) に高校 31 回生卒業記念品として作成され、附設高校中庭に設置されている。

70 年振りに甦った初代校歌と混声三部合唱校歌の初演

2020 年 7 月 2 日 (木)、兼行孝幸先生から、附設高校合唱部による校歌演奏の収録が、何とか無事に開催できる運びとなった旨、メールで連絡をいただいた。

現在実施中の定期テスト終了後、まもなく部活動を本格的に再開出来る見込みであること、合唱活動自体は新型コロナウイルスの飛沫感染の観点から相当に警戒しながらの再開であること、8 月 2 日 (日) 午後石橋文化ホールを借りて収録する予定であること、全国大会で披露する予定だった曲目をはじめ、筆者が依頼した校歌 2 種類の演奏もできると考えていること、石橋文化ホール施設利用に際して感染防止拡大の措置を最大限実施することが主催者側の義務となっており、合唱部保護者・附設高校教員及び 37 回生の関係者のみ公開とすることなどが書かれていた。

最初に兼行先生に校歌の演奏をお願いした 2 月とは、社会情勢も附設高校の状況も大きく変わっていた。4 月 7 日に国から緊急事態宣言が発令され、附設高校の入学式は 6 月に延期されていた。また、社会一般でも合唱は飛沫感染のリスクが高いので自粛の動きが広がっており、8 月に高知で開催予定だった全国大会も高知に一同に会しての開催は中止となり、動画での参加となった。

現役高校生は、感染防止のため、学業でもオンラインでの対応など負担を強いられており、さらに 6 月末には記録的な豪雨も久留米を襲っていたことから、おそらく部活動どころではなく、校歌の演奏が中止となってもおかしくないと危惧していた。そうした中で、無事収録できる見込みである旨の連絡をいただけたことは、本当に救いであった。

兼行先生および合唱部員の皆様も、これまでは十分に練習できる機会は無かったであろうから、実質これから 1 ヶ月の間で集中して練習するのであろう。10 月の同窓会は中止になったのだから、短い練習時間を全国大会用の曲目だけに集中する選択肢もあったと思うが、兼行先生および合唱部員の皆様は、二曲の校歌をそのまま演奏曲目に残すという選択をしてくれた。これはいくら感謝しても足りず、何が何でも久留米に馳せ参じて、直接、校歌斉唱の歴史的瞬間を聞き届けねばと思った。

しかし、7 月に入ると、全国での新型コロナウイルス感染者数は再び右肩上がりが増え始め、政府は GO TO キャンペーンを旗振りしているものの、都道府県をまたぐ長距離の移動は避けるべきとの風潮が広がってきた。福岡での感染者も増え始め、7 月 21 日には附設高校の先生が感染した (自宅待機していたため生徒や同僚に濃厚接触者は無し) との報道もネットで目にした。こうした社会情勢の中、ぎりぎりまで東京から福岡への移動を自粛すべきか悩んだが、感染防止に万全を期して、福岡に行くことに決めた。

空港はなんとなく感染リスクが高そうな気がしたので、飛行機は避けて、新幹線で行くことにした。

8月1日(土)の早朝、JRみどりの窓口で、できるだけ周りに乗客がいない席を予約して、朝6時の始発の新幹線で東京駅から博多に向かった。私が乗った車両にいた乗客は東京駅で5人くらいだったろうか。広島を過ぎると2人しかおらず、とりあえず殆ど人と接触せずに、福岡入りすることができた。

博多駅から地下鉄に乗って西新で降り、徒歩で福岡市総合図書館に向かった。ここに向かったのは理由がある。大石亀次郎先生の自叙伝3冊のうち、「教壇五十年」と「百寿遺言状」は東京の国立国会図書館に収蔵されているが、「米寿言行録」は福岡市総合図書館と佐賀県の図書館にしか無いのだ。時間が十分にあったので、午後、「米寿言行録」を熟読した。

1ページ目冒頭から、「真と善美を逐うて米寿までやって来た。」で始まる序文に胸が躍った。いきなり校歌の歌詞にも使われている「真善美」にお目にかかれるとは。読み進めると、開校直後に校歌を作ったことや歌詞についての記述があった。曲改定に関する記述は残念ながら無かったが、昭和50年(1975)に附設高校東京支部同窓会に来賓としてはるばる東京まで来ていただいたことに関してはページを多く割かれており、興味深く読ませていただいた。末尾にはご子息大石弘之さんによる寄稿もあり、7月にお電話でお話させていただいたお孫さんの大石正仁さんの幼い頃のエピソードも書かれていた。

そして8月2日(日)、いよいよ附設高校合唱部のサマーコンサートである。会場は、高校時代、登下校の途中で毎日目にしてきた石橋文化ホール。附設高校の礎を築かれた石橋正二郎氏ゆかりの地でもあり、昭和43年(1968)に、附設関係者とも縁が深い合唱曲「筑後川」が初演された場所でもある。

旧御井校舎や現在校舎がある正源寺の丘を除けば、校歌が披露される場所としては、これ以上相応しい場所はないだろう。藪文人先生の急逝後、この石橋文化ホールで九響による追悼コンサートが開催され、ご長男の藪博之先生が指揮をなさったとも聞いており、これも不思議な縁を感じるところである。

全国大会向けの録画が主目的であり、保護者など、少人数の関係者に限定したコンサートなので、これといった看板が出ている訳ではない。開場時刻の14時30分、ホール入口前で待ち合わせていた37回生同期の田邊晴康君が現れた。万が一感染者が発生した場合に備えて住所氏名を受付で記入した後、機械で体温をチェックし、念入りにアルコールで手を消毒した後、ホール中央付近に、田邊晴康君とは約2メートル程度、距離を空けて座った。

聴衆の保護者は見た感じ20~30名程度であろうか。1,000人収容のホールで、十分ソーシャルディスタンスが保たれていた。ステージに近い最前列の数列も、使用禁止のテープが貼ってあり、ステージと客席の間をできるだけ空ける工夫がなされている。

後ろを振り返ると、10メートルくらい後方に、この日招待されていた田村徹先生と、10回生の古賀暉人先輩が座っておられたので、立ち寄って、改めてご挨拶をさせていただいた。

開演まであと30分くらいあるので、入口で配布されていたプログラムに目を通した。本日披露されるのは全8曲で、冒頭1曲目が滝田卯夫先生作曲の4拍子の初代校歌だ。プログラムには「1951(昭和26)年5月30日制定、3週間だけ存在した幻の校歌です。70年振りの演奏となります。」との補足が書かれており、数メートル前に座っていた保護者ご夫婦からも「幻の校歌、70年振りだって」との期待の

声が聞こえてきた。筆者も「70年振り」という表現を本稿では使用しているが、これまでの調査では、どうも実際に歌われた様子がなく、生徒による公式演奏は、作曲から70年目にして、これが初演だったのではないかと思っている。

そして2曲目は、藪文人先生作曲、田村徹先生編曲の3拍子の混声3部合唱の校歌だ。こちらにも、「現校歌を田村徹先生が3部合唱に編曲して下さいました。今回初披露となります。」との補足が書かれている。また、最後の7~8曲目は、全国大会で披露する曲である。

プログラム裏面には、上段に合唱部第10代部長のMさんのご挨拶が書かれていた。全国大会や文化祭(男く祭)が中止になった悔しさをバネに、本日の演奏会を目標にして練習を重ねてきたこと、高校3年生にとっては最後のステージとなることが書かれており、この日のステージにかける熱意が改めて伝わってきた。

プログラムに掲載されている合唱部員の数を数えてみると40名を超えている。私が在学中にはこれだけの大所帯の部活は無かった気がする。ヴォイストレーナーの先生もいらっしゃるし、創部10年で全国大会出場レベルまで実力を高め、一大勢力を築くとは本当にすごいと感心した。

プログラムには、合唱部顧問かつ指揮者の兼行孝幸先生の音楽活動に関するご経歴も詳細に書かれており、「附設高校40回生、地理の先生、教務部長」という情報しか持っていなかった私は、兼行先生が合唱部顧問である理由を初めて理解した。

なかでも、「大学では慶応義塾大学ワグネル・ソサイエティー男声合唱団に所属」の一文には目を奪われた。時代は重ならないが、藪文人先生の最期を久留米で看取った盟友、木下保先生が指揮・指導を行っていた合唱団のご出身ではないか。その藪文人先生作曲の校歌を兼行先生がこれから久留米の地で指揮をされる。色々な人が色々な所につながっているのだと、様々な縁を感じていた頃、開演のアナウンスが始まった。

<プログラム表面>

久留米大学附設高等学校 合唱部
SUMMER CONCERT
2020(令和2)年8月2日(日) 15:30開演 (14:30開場)
石橋文化ホール

< Program >

- 久留米大学附設高等学校 校歌 作詞:大石 龜太郎 作曲:滝田 卯夫 ピアノ:秋吉 優佳
1951(昭和26)年5月30日制定。3週間分存在した30校歌です。70年振りの演奏となります。
- 久留米大学附設高等学校 校歌 作詞:大石 龜太郎 作曲:藪 文人 編曲:補筆:田村 徹
現校歌を田村 徹先生が3部合唱に編曲して下さいました。今回初披露となります。ピアノ:秋吉 優佳
- クワキ 作詞:まどみちお 作曲:なかにしあかね ピアノ:庄司 真悠
- Abide With Me 作詞:Henry F. Lyte 作曲:William H. Monk 補編曲:兼行 孝幸
- 若葉のすばて 作詞・作曲:志村 正彦 編曲:中嶋 紳造 ピアノ:庄司 真悠
- 時代 作詞・作曲:中島 みゆき 編曲:信長 貴典 ピアノ:庄司 真悠
- 見えてる 作詞:塔 和子 作曲:森山 直貴 ピアノ:秋吉 優佳
- This is Me from "THE GREATEST SHOWMAN"
作詞・作曲:Benj Pasek & Justin Paul ピアノ:秋吉 優佳
補編曲:Mac Huff

<プログラム裏面(一部加工)>

合唱部 部長挨拶 第10代部長
本日はサマーコンサートにお越し頂き、誠にありがとうございます。昨年度の夏音楽大会で最優秀賞を頂きましたが、残念ながら全国大会中止となってしまいました。49に文化祭が中止になってしまい、その悔しさをバネに、本日の演奏会を目標として精一杯練習を重ねてきました。皆員一同、歌う喜びを噛みしめ、最高の演奏をお届けします。皆3の先輩方にとっては最後のステージとなります。
短い時間ですが、どうぞお楽しみ下さい。

<附設合唱部 部員紹介> 顧問:兼行 孝幸・山口 利敏
部長
副部長
Soprano
Alto
Tenor
Bass

<顧問・指揮者紹介> 顧問・指揮者 兼行 孝幸
大川市出身。桐蔭高校在学中に合唱に出会い、以来25年以上合唱に関わる。大学では慶応義塾大学ワグネル・ソサイエティー男声合唱団に所属し、堀中良輔先生・北村協一先生のご指導のもと、定期演奏会・帝國ホテルのミスコンパートをはじめ数多くの演奏活動を行う。
1996年度、声楽アンサンブル Pops Show You を結成以来、福岡・久留米地区を中心に精力的に演奏活動を展開。2018年11月、Pops Show Youメンバーとして久留米市芸術祭助演を受賞。
慶應義塾大学法学部卒業。久留米大学附設中学校・高等学校教諭。高校67回生学年主任・担任を経て、現在は教務部長を務める。担当教科は社会(地理)。

<ヴォイストレーナー> 井上 佳奈子
三野野音楽大学音楽学部声楽学科卒業。同大学卒業演奏会、福岡県芸術祭新人演奏会、第13回(むめろ)新人演奏会等に出演。
ファンタム・シラネ務納。また、保育園、教会など、様々なコンサートやイベントで演奏している。
これまで吉田雅子、中山文雄、シブムナ・ウーエーの各氏に師事。現在、音楽監督のんどう 声楽、ピアノ講師。大刀洗清声合唱団ヴォイストレーナーも務める。2019年度より、久留米大学附設高等学校合唱部ヴォイストレーナーも務める。

本日記録本之巻は <http://www.websobun.com/> にて、10月まで公開予定です。お楽しみ下さい。

高校1年生から3年生までの約40人の若き俊英たちがステージに立っている。そして、指揮者の兼行先生が入場し会場に向かって一礼をする。

拍手の後すぐに静寂が訪れ、1曲目が始まった。

「こうらんかーの、がくーえーんにー」。お馴染みの歌詞だが、4拍子で現在の校歌とは全く曲調が違う。パソコンの打ち込み音源で耳慣れてはいたが、実際にホールで聴く男女混声のハーモニーは非常に美しかった。聴衆の保護者の中に附設卒業生がどれくらいいたのかはわからないが、もしコロナ禍がなく、あの3拍子しか知らない附設卒業生が会場を埋めていたら、おそらく1曲目終了時にどよめきが起こっていただろう。

美しい1曲目が終わったとき、なぜ校歌の曲が変わったのか、なんとなくわかったような気がした。これは完全な主観で裏付けは何もないことを先にお断りしておくが、滝田卯夫先生作曲の初代校歌は、おそらく、上品すぎるのだ。

女声、または混声のハーモニーがしっくりくる、非常にきれいな曲で、附設が女子高や共学であったならば、このままだったような気がするが、男子校としてスタートした附設には、軍歌や寮歌のような、もっと躍動的な雄々しさ、荒々しさを求める声が、先生方からおそらく出たのではないだろうか。

そして、2曲目が始まった。藪文人先生作曲、田村徹先生編曲の3拍子の混声三部校歌である。

ユニゾンの男声合唱の校歌しか知らない私の世代の耳に、男女共学らしい混声の、かつ掛け合いもある躍動感に溢れる新たなメロディが鳴り響いた。こちら、パソコンの打ち込み音源を事前に聴いてはいたが、生の演奏は全く異なるものであった。ダイバーシティ&インクルージョンというか、男女共学時代に相応しい、多様性に満ちた新しい校歌の誕生であった。

校歌2曲の演奏が終わった後、合唱部長のMさんによる曲説明が披露された。

「本日は久留米大学附設高校合唱部サマーコンサートにご来場いただきまして、誠にありがとうございます。合唱部部長のMです。新型コロナウイルスの感染拡大が心配される中、このような演奏会を開催できることに、心より感謝申し上げます。私達合唱部も、厳しい状況の中で、最善の対応を模索しつつ、今日の演奏会を目標に、日々自分たちの音を磨いてきました。さて、まずお聴きいただいたのは、我らが附設高校の校歌です。一曲目は、滝田卯夫先生作曲、大石亀次郎先生作詞の、4拍子の校歌、二曲目は、藪文人先生作曲、田村徹先生が編曲をされた、混声三部合唱による、3拍子の校歌です。田村先生は、藪先生の高校時代の教え子でいらっしゃるということで、3拍子の校歌を、三部合唱に編曲していただき、男女共学の現在の附設に相応しく、より躍動的で、壮大な校歌に仕上げてくださいました。また、一曲目の4拍子の校歌については、昭和26年に作曲され、理由はわかりませんが、たった3週間でなくなってしまったという幻の校歌です。今回、附設高校同窓会東京支部の幹事長をなさっている、高校37回生、丸山先輩からのご依頼で、実に、70年振りにこの校歌を蘇らせることとなりました。このような名誉な機会をいただき、非常に光栄に思っております。」

まさか、筆者の名前まで挙げていただけたとは思ってもいなかったもので、とても照れ臭く、面映ゆい感じがした。こちらこそ、このような歴史的な瞬間に立ち会う機会をご提供いただき、ありがたい限りである。附設高校合唱部のみなさん、本当にありがとう。声には出さなかったが、心の中で何度もお礼をした。ちなみに、これまで述べてきたとおり、音楽の素養がない筆者が、実は大学時代、友人に誘われて東京大学白ばら会合唱団という合唱団に入り、幹部学年の時はマネージャー（団長）を務めていたという事実は、あまりに恥ずかしくて、まだ兼行先生にも合唱部員の皆様にもお伝えできていない。

この後、附設合唱部現役部員（1～2年生）による素晴らしい演奏が次々と披露された。全国大会に提出する最後の二曲は、これで高校生活最後のステージとなる3年生も加わって、魂のこもった圧巻のステージとなった。

<2020年8月2日附設高校合唱部サマーコンサート>

音声のURLはこちら（下記URLのQRコードは右下）

<https://drive.google.com/file/d/1MMMrpt28f8lbEGUNQhBU5q0rLCkE4mScY/view?usp=drivesdk>

- 0:23～2:25 校歌（滝田卯夫先生作曲の4拍子の校歌）1～3年生全員
- 2:36～4:16 校歌（藪文人先生作曲、田村徹先生編曲の3拍子の混声三部合唱）1～3年生全員
- 4:38～6:35 合唱部部长による挨拶と校歌2曲の説明
- 6:36～7:45 1～2年生が歌う曲の説明（3年生はいったんステージを降りる）
- 8:04～11:50 ケヤキ（1～2年生）
- 12:00～14:42 Abide With Me（1～2年生）
- 15:12～19:58 若者のすべて（1～2年生）
- 20:20～25:04 時代（1～2年生）
- 25:30～26:30 全国大会の2曲の説明
- 27:16～31:32 見えてくる（1～3年生全員）
- 32:02～35:42 This Is Me（1～3年生全員）
- 36:14～39:46 合唱部顧問・指揮者 兼行孝幸先生のご挨拶と終演アナウンス



約40分弱の短い演奏会が終わり、兼行先生がステージ上でご挨拶をされた。新型コロナウイルスの影響で練習もままならず、演奏会もぎりぎりまで開催できるか不透明で、本当に苦労されたようだ。感染予防のため、ロビーには出て来られず、ステージ上でのご挨拶にて閉演となった。田村徹先生も満足そうなお表情で、会場を後にされた。私と田邊晴康君は、帰り際に一瞬だけ兼行先生のお近くまでいくことができたので、時節柄2メートル近くは距離を空けたものの、直接お礼を申し上げ、帰途についた。

帰りの西鉄電車の中で、「いやー、良い演奏会だったなあ。兼行先生の指揮も情熱的だったなあ。指導者が立派だと、部活動は強くなるんだなあ」と、同期の田邊晴康君と話し合いながら、宿泊先の天神のホテルに戻った。

翌日、東京に戻る前に、少しだけ篠栗の妙福寺に立ち寄り、藪家の皆様に許可をいただいて、かつて藪文人先生がピアノを弾いておられた本堂に上がらせていただき、合掌しながら、石橋文化ホールでの

校歌の演奏が無事に終了したことを、藪文人先生と藪博之先生に報告した。

10分程度の僅かな時間の訪問であったが、藪文人先生の生家、湯豆腐と焼酎を嗜まれていた中庭の余韻に浸った後、篠栗駅を後にし、博多駅経由で、またまたガラガラの新幹線で東京に戻った。梅雨明け後の良く晴れた、非常に暑い夏らしい一日であった。

大石亀次郎先生との邂逅

今回の半年ぶりの帰福で、附設高校合唱部の演奏を聞き、妙福寺にお参りし、福岡市総合図書館で「米寿言行録」も読むことができたが、一つ心残りがあった。2月に母校に訪問したときは、同窓会事務局には「ふよう」が第13号以降の一部しか収蔵が無かったので、次回久留米に行くことがあれば、附設高校図書館に寄って、おそらく収蔵されているであろう創刊号から第19号までの全巻を読みたいと思っていたのだ。しかし、コロナ騒ぎの中で母校に立ち寄って長居するわけにはいかず、今回は東京にまっすぐ戻った。

37回生同期の永江雅和君がネットの古本屋で「教壇五十年」を見つけたように、もしかしたらネットで出品されていたりしないだろうか、「附設 ふよう」と入れて検索すると、なんと、売られていた。

「久留米大学附設高等学校文芸部雑誌 ふよう 創刊号から19号まで19冊揃 (久留米大学附設高等学校 昭26-43) 税込36,400円 佐賀県佐賀市 洋学堂書店」

卒業生のどなたかが廃棄するには惜しくて古書店に売ったのか、いや卒業生は自分の在学中のふようしか持っていないだろうから、全巻揃っているとはどういうことか等、疑問は尽きないが、とにかく今、久留米まで行かなくとも、ふようを手に入れる手段が目の前に存在している。しかし、36,400円は高い。

値段に少し逡巡したが、東京から久留米までの往復旅費と考えればそれくらいかかるだろうし、コロナで特別定額給付金を10万円ももらったではないか。安倍政権も古本購入に給付金を消費する国民がいると予想したかどうかはわからないが、思い切って申し込むことにした。いったい何年間出品されていて、買い手がつくまで待っていたのだろうか。

買い注文が確定すると、洋学堂の店主から、購入商品の補足に関するメールと本の状態の写真が送られてきた。

「ご注文ありがとうございます。商品は1～10号(合本一冊)、11～15号(合本一冊)、16～19号未製本という状態です。本書は久留米附設教諭大石亀次郎先生(国語漢文担当・文芸部顧問)の旧蔵書で一部に先生の線引き書き込み、付箋糊付跡があります(多くはありません)。※画像を別便でお送りします。」

なに、大石亀次郎先生の旧蔵書だって！ 確かに、送られてきた画像の製本背表紙には、「大石」の名も記載されている。しかも線引きや書き込みもあるとは。まさかこんなところで大石亀次郎先生の蔵書と巡り合うことができるとは思いもしなかった。筆者は、大石先生の旧蔵書が届くのを楽しみに待つと

同時に、洋学堂の店主に、どのような経緯で入手したのか、差し支えない範囲で教えて欲しいとメールしたところ、以下の返事をいただいた。

「丸山さま このたびは資料をご購入いただきありがとうございます。

本資料は10年以上前に古物業者を経て当店に入荷したものです。大変古い本が多かったのを記憶いたしております。また、吉川幸次郎博士からの手紙や、軍隊時代の騎馬隊資料、二松学舎時代の本など多彩にわたっていました。素養の深い先生という印象でした。今となっては当店の度の蔵書が大石先生のものだったか定かではありませんが、国文学・漢文学関係が多かったように記憶します。どのようなルートで当店に至ったのかは定かではありませんが、主だった本を選別したのちの不用品として廃棄されたものを古物業者が当店へ持ち込んだ感じでした。」

このお返事を見て、ふようは母校にも保存されているので、おそらく大石亀次郎先生ご本人もしくは遺族の方が過去に手放されたのだろうと推察した。洋学堂店主の方にも、10年以上除却せずに、買い手が現れるまで、辛抱強く待っていただいていたことに感謝である。



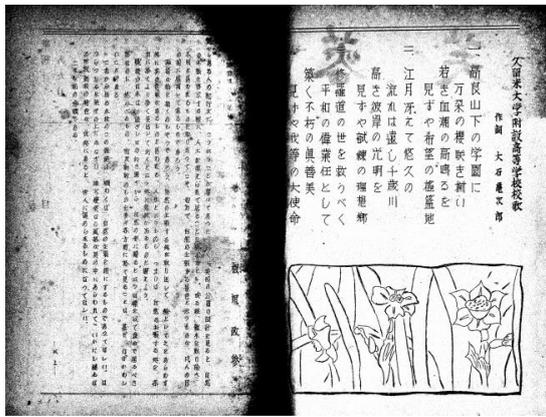
大石亀次郎先生の旧蔵書の「ふよう」。

左から2冊目の製本には「大石」の記載がある。

第17号の背表紙には、自らが寄稿した文章の題名（孔子新論）が手書きで書かれている。

2020年8月8日（土）、洋学堂書店から宅配便で小包が届いた。丁寧な包装を開けると、事前に送られてきた写真のとおり「ふよう」全集が入っていた。しかも大石亀次郎先生の旧蔵書である。この貴重な歴史書を、創刊号から順を追って、1ページずつ丁寧に目を通していった。

創刊号の裏表紙は、いきなり校歌の歌詞が記載されていた。ふよう創刊号の発行は昭和26年（1951）7月14日なので、校歌ができて約1か月後の間もない時期である。創刊号はまだ活字ではなく手書きだ。6ページには「神辺山人」の名で大石亀次郎先生の漢文による「久留米大学附設高等学校之記」が掲載されているが、製本の際にだいぶ書き写しミスがあったのか、大石亀次郎先生が赤ペンで何か所も修正された形跡がある。発刊後に校正されておられるところが大らかな時代で微笑ましい。



ふよう創刊号の裏表紙。右側に校歌の歌詞。
左側は、板垣政参校長の冒頭挨拶文。

創刊号発行の時期には、既に滝田卯夫先生から藪文人先生の曲に代わっていたはずであるが、「作詞 大石亀次郎」とだけ記載されており、校歌の作曲者名は記載されていなかった。創刊号巻末には「校内記要」が日次で記載されており、「昭和二十六年五月三十日 校歌々曲なる」と、初めて附設の歴史に校歌が登場する。

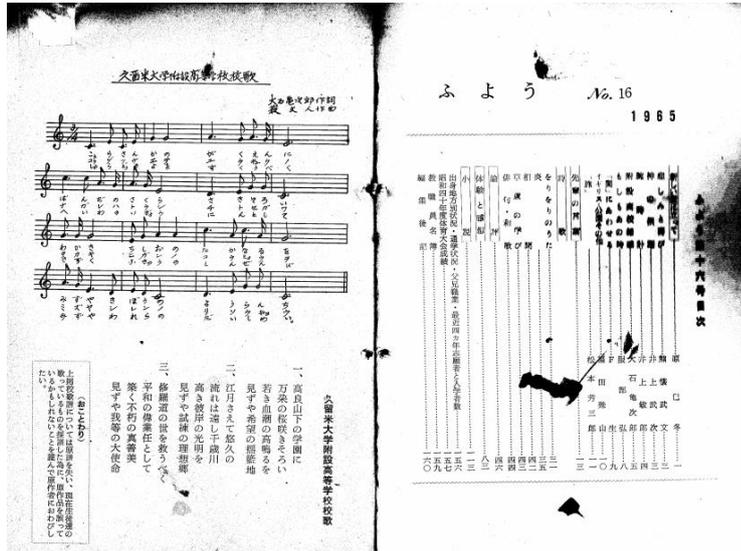
その後、校歌に関する記載に注意しながら読み進めていったが、校歌以外にも、当時の教員や生徒達の寄稿には興味が尽きなかった。朝鮮戦争や水爆実験、安保闘争などは、私たちにとっては既に歴史の一部だが、当時の高校生たちにとってはリアルタイムで起きていた出来事で、多くの寄稿から当時の若者の世相の捉え方が伝わってきた。A級戦犯として死刑となった弟・板垣征四郎氏に対する無念の想いを吐露した、初代板垣政参校長の一文もある。「ふよう」は戦後史を体感できる教科書のように感じた。

興味は尽きないのだが、ここは「校歌」に絞って順次記載することにする。創刊号から昭和43年(1968)に第19号で廃刊となるまでの間、非常に多くの生徒の作文が掲載されているのだが、作文には毎回テーマが課されていたこともあり、作文で校歌に触れている例は数える程しかなかった。

創刊号(昭和26年(1951)7月発行)の裏表紙で校歌の歌詞がいきなり登場し、巻末で校歌制定日の記載がなされた後、次に校歌に関する記載が現れるのは、10年後の第12号(昭和36年(1961)11月10日発行)、巻末の「久留米大学附設高等学校史」においてである。ここで初めて、「作詞 大石亀次郎」と合わせて、「作曲 滝田卯夫」の記載が登場する。創立時の項への記載なので初代校歌作曲者の滝田卯夫先生のお名前間違いはないのだが、当時既に歌われていて十年が経過している藪文人先生のお名前はまだ登場しない。

第13号(昭和37年(1962)12月5日発行)、第14号(昭和38年(1963)12月10日発行)でも同様の記載が続き、第15号(昭和39年(1964)11月3日発行)では、滝田卯夫先生の記載も無くなる。そして、第16号(昭和40年(1965)11月3日発行)で、手書きによる復元楽譜が表紙裏冒頭に掲載され、ここで初めて「藪文人作曲」の文字が登場する。楽譜紛失に対してのお詫び書きも記載されている。楽譜冒頭には3拍子であることを示す「3/4」もはっきりと書かれている。

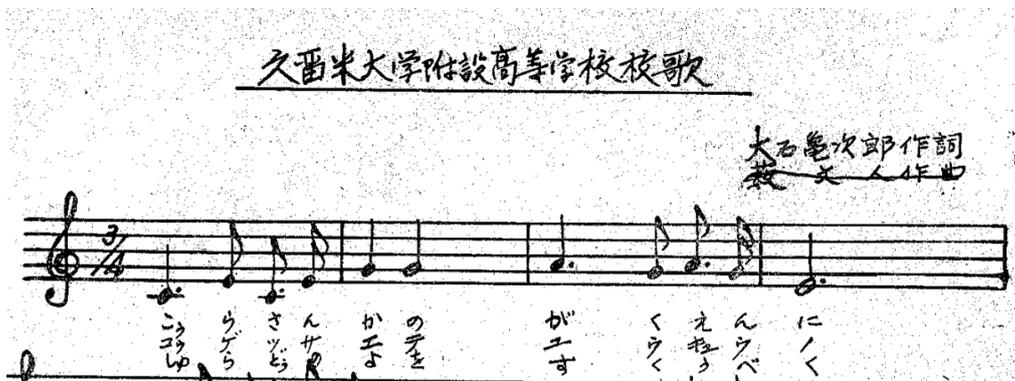
<ふよう第16号 冒頭>



第17号（昭和41年（1966）11月20日発行）も同様に、表紙裏に手書きの復元楽譜が掲載されているのだが、ここで一つ異変に気が付いた。「藪文人作曲」の文字を、黒ボールペンで削除した形跡がある。これは大石亀次郎先生の旧蔵書だから、大石亀次郎先生が自ら引かれたものとは考えられない。

これ個人的な推測だが、創刊号の表紙裏の校歌には作曲者名を記載しなかったこと、その後の「ふよう」でもなかなか作曲者の氏名が出されず、創刊後10年でやっと学校草創期の歴史に「滝田卯夫」の氏名が登場していること、昭和58年（1982）の高校31回生の卒業制作である校歌碑にも作曲者名は記載しなかったこと等から、大石亀次郎先生は、滝田卯夫先生と藪文人先生という二人の校歌作曲者双方に敬意を示して、自らが関係する校歌関連の資料には、作曲者名は記載しないというポリシーを貫かれたのではないかと想像している。

<大石亀次郎先生による線の引き込みがあるふよう第17号冒頭の校歌譜>



そして、第18号（昭和42年（1967）10月15日発行）では、掲載されている楽譜は活字になっているのだが、冒頭の「3/4」は落ちてしまい、符点が落ちて拍もおかしくなっている。

久留米大学附設高等学校校歌



そして、昭和43年（1968）3月31日、大石亀次郎先生は長年勤められた附設高校を退任され、最終号の第19号（昭和43年（1968）12月20日発行）にも、大石亀次郎先生の「告別之辞」などの特別寄稿が掲載されるとともに、この誤った活字版楽譜が掲載されている。ちなみに、昭和52年（1977）11月6日に発行された「附設高等学校二十五年史」にも、この誤ったままの活字版楽譜が掲載されており、しばらくはこの（誤った）楽譜が正式な楽譜として使われていたようだ。

藪文人先生の本譜は何らかの理由で紛失し、それを生徒または職員が耳コピで手書きで復元し、それを活字楽譜にした際にさらに誰かが誤り、混乱がみられるこの楽譜が田村徹先生の目に留まり、共学化した附設高校に混声三部合唱として舞い戻ってきた訳である。約70年にわたる壮大なりレーを誰が仕掛けたのかはわからないが、こんな物語のある校歌を持つ学校はそうは多くないだろう。

ふよう全巻に目を通した結果は以上のとおりである。校歌の曲改定の理由に関する直接の記載はなかったが、大石亀次郎先生の蔵書の書込みを通して、作曲者は二人いることから、できるだけ作曲者名は目立たせたくなかったのだろう、という推測を立てることはできた。

手元にある「ふよう」全巻を見ていると、「よくここまでたどり着いたな。でもそう簡単には曲改定の理由は教えないよ。創立百周年までにはわかるとういうの。」と、大石亀次郎先生が語り掛けてくるような気がした2020年の8月であった。

蘇った校歌二曲のご感想（藪淑子先生より）

2020年8月2日（日）の附設高校合唱のサマーコンサートをスマホで録音した音源を音楽用CDに記録して、広島に住む藪淑子先生にお送りしたところ、後日、懇切丁寧な礼状をいただいた。附設高校合唱部のみなさまをはじめ、附設関係者にとっても、我らの校歌に一層の誇りと親しみを持てる内容であり、藪淑子先生のご了承もいただいたので、一部をご紹介します。

コロナ危機の日々、それに大暑と苦しい夏となりました。
先日、お便り、CDをありがとうございました。
お元気に活動をされておられる御様子、大へんよろこばしいことと存じます。
私の方、齢には勝てずの生活がやっとの日々でございます。

八月二日、クルメでコンサートが開かれた由、大へんうれしいことでございますネ。母校の校歌に何を思はれましたでしょう。校歌を聞かせていただき、久々に聞く若者の歌声に感動いたしました。忘れてしまっていた大切なものを思い出し、泣きました。やっぱり歌声ほどすばらしいものはないと、つくづく熱くなりました。ありがとうございました。

青春時代があったことでした。現在のことばかりで暮らしていましたネ。毎日聴くことにしました。田村先生の編曲も、二曲とも心あたたまる素晴らしい校歌ですネ。校歌とはいいものですネ。私にもあったはずの校歌、すっかり忘れています。悲しいです。

篠栗の寺の子供が（福岡の師範学校も出ていました）音楽を学ぶために東京へ。驚きでした。音楽、バラ造り（今でもピースと言ううす黄色の花を思い出します。手はバラの棘で傷だらけでしたネ）、車を運転し、早朝、犬と散歩、猫たちも可愛がり、夜は好物のお酒、お豆ふに刺身と、メニューも決まっていました。家庭人としてもやさしい父でした。

以前にも申しましたが、レコードを聴く折も、竹針を使っていた時代でした。（昭和三十三年）今思えば、かなりモダンな人だったと思います。私たちは結婚後、半年、共に暮らしました。（父の希望でした）明治生まれの男性の粋でしょうか。時代が人を作っていると思いますから。

<中略>

校歌は学校がある限り、歌いつがれて行くと思えば、作曲者冥利に尽きますネ！！
博之さんにも聴かせてあげたかったです。博之さんもすべてに愛をこめた生活を送っていました。彼は非常に良い耳を持っていました。ピアノの音色はすばらしかったです。

<中略>

仏様たちにも校歌を聴いてもらっています。色々と報告も致しております。
筆舌につくしがたくの心境でございます。少々悲観的に暮らしていたものですから、失礼をお許し下さいませ。乱筆乱文で失礼をいたしました。

丸山剛弘様

藪 淑子

おわりに

以上のとおり、作詞者大石亀次郎先生、作曲者藪文人先生、滝田卯夫先生を探し求めることで、改めて附設高校草創期の設立者や関係者たちの思いなど、母校や校歌への理解を深めることができた。

また、残念ながら2020年10月10日（土）に予定していた附設高校同窓会東京支部総会・懇親会は新型コロナウイルスの影響で中止となったが、田村徹先生や現役の附設高校合唱部員のご協力によって、初代校歌と混声三部合唱の新たな校歌を後世に残すことができた。

なぜわずか三週間で滝田卯夫先生の曲から藪文人先生の曲に変更になったかは、現時点では判明していないが、本稿に目を通し興味をもった方が、いずれ解き明かしてくれるものと期待している。

校歌のルーツ調査にご協力いただいた多くの皆様、そして素晴らしい演奏の実現につなげていただいた田村徹先生や附設高校合唱部の皆様に深く感謝申し上げるとともに、天国の大石亀次郎先生、藪文人先生、滝田卯夫先生に附設高校同窓生の歌声がしっかり届くことを祈念して、筆をおくこととしたい。

2020年9月6日（日）

久留米大学附設高等学校同窓会

東京支部総会 2020年度幹事長

丸山 剛弘（37回生）

<参考文献等>

- 久留米大学二十五周年記念会（1954）『久留米大学二十五年史』
久留米大学附設中学校高等学校（1977）『附設高等学校二十五年史』
久留米大学附設中学校高等学校（1989）『仰慕帰心』（四十年史）
久留米大学附設中学校高等学校（2000）『和而不同』（五十年史）
久留米大学附設高等学校文芸部『ふよう』第1号～第19号（1951～1968）
大石亀次郎（1967）『教壇五十年』
大石亀次郎（1976）『米寿言行録』
大石亀次郎（1988）『百寿遺言状』
藪斗四子（2002）『花杏』
徳正寺光輪会（1994）『十七年間病床者 藪貞子氏の言行録 白蓮華』
桐原一成、安元文人（1980）『明善物語 風雪百年』西日本新聞社
中村八大（1992）『ぼく達はこの星で出会った』講談社
久留米高等女学校（1948）卒業アルバム
社団法人日本著作権協議会（2001）『著作権台帳文化人名録』
久留米市史編さん委員会編（1981～1998）『久留米市史』
寿栄会（2006）『七代 一郎おじいちゃんってどんな人？幸江おばあちゃんってどんな人？』
上野正章（2012）「明治中期から大正期における洋楽器で日本伝統音楽を演奏する試みについて 一楽譜による普及を考える一」（日本伝統音楽研究 vol.9）

日本幼稚園協会（1923）「幼児教育」第23巻第5号
滝田卯夫、山内俊次（1931）「新作昭和童謡唱歌」明治図書
柳川市立蒲池中学校ホームページ
https://www.city.yanagawa.fukuoka.jp/kyoiku/kyoiku/chugakko/kamachi_jh/gaiyou.html
私立久留米大学附設高校校歌（3拍子）
<http://www.kurume-u.ac.jp/site/fusetsu/prospectus-song.html>
八女高等学校校歌（4拍子）
<http://yame.fku.ed.jp/html/hp020101.html>
筑紫野市立阿志岐小学校校歌
<https://ashikisho.jimdofree.com/校歌/>
久留米市立山川小学校校歌（3拍子）
<http://www.yamakawa.kurume.ed.jp/kouka.html>
久留米市日吉尋常小学校校歌
<http://www.hiyoshi.kurume.ed.jp/syukai/rekisj2.pdf>
福岡県立八女農業高等学校校歌
<https://ja.wikipedia.org/wiki/福岡県立八女農業高等学校>
『明善新聞』（1960年7月1日発行）
http://meizen37.schoolbus.jp/cgi-bin/jinryoku-bbs/shiryo/meizen_news1960_07.pdf
原行一氏（昭和23年3月旧制明善中学卒）自分史「Mr.YXYのホームページ・リンク集」「激動昭和・戦中派少年期の記録」
<http://otolithks5nhkk.fan.coocan.jp/index.html>
<http://otolithks5nhkk.fan.coocan.jp/dexsenchuha.html>
團伊玖磨生誕85周年記念 佐藤しのぶ久留米公演に寄せて（團伊玖磨と久留米）
<http://www7.plala.or.jp/tikugogawa/85/kurume2.html>
明善高校昭和37年卒業生・6組田中さんのブログへの寄稿（2006年5月）
http://meizen37.schoolbus.jp/cgi-bin/jinryoku-bbs/shiryo/bbs_log/bbs2006.html
文化の仕掛人 米替誓志の軌跡
<https://seagulls.co.jp/human/traverse4.html#app01>
ひろつぐのブログ
<http://htgkato.cocolog-nifty.com/blog/2013/09/post-8cb2.html>
田村徹先生ホームページ
<http://salida1.web.fc2.com/tamuratooruryakureki.html>
明善高校管弦楽部ホームページ
<http://meizen.fku.ed.jp/html/life/orchestra2.html>
妙福寺ホームページ
<http://myoufukuji.life.coocan.jp/>

< ご協力いただいた方（順不同） >

大石弘之さん（大石亀次郎先生のご子息、医師）

駒井礼子さん（駒井あやこクリニック院長、大石亀次郎先生のご令孫、大石弘之先生のご息女）

大石正仁さん（医師、大石亀次郎先生のご令孫、大石弘之先生のご子息）

藪淑子さん（武蔵野音楽大学声楽科卒、元香蘭女子短期大学講師、藪文人先生のご長男博之氏の奥様）

藪美恵子さん（妙福寺第十二代坊守、藪文人先生の甥の奥様）

妙福寺の皆様（藪美恵子さんのお孫さん他）

田村徹先生（作曲家、文教大学名誉教授、武蔵野音楽大学卒、明善高時代に藪文人先生に音楽を教わる）

本間敬二先生（武蔵野音楽大学卒、(株)ユニゾン代表取締役、祖父は初代附設後援会長の本間一郎氏、

お父様は男く祭コーラス大会の審査員もお勤め頂いた指揮者・医師の本間四郎氏）

堺康馬先生（武蔵野音楽大学教授、ピアノを藪文人先生のご長男・藪博之氏に師事）

赤木泉先生（武蔵野音楽大学卒、ピアノを藪文人先生のご長男・藪博之氏に師事）

野尻絹乃さん（旧姓：田中）（筆者の母の知人、久留米高等女学校五十回生、藪文人先生に音楽を教わる）

今村京子さん（旧姓：近藤）（筆者の伯母の夫の姉、柳河高等女学校卒、滝田卯夫先生に音楽を教わる）

明善高校同窓会事務局の方

福岡高校同窓会事務局の方

石原孝子さん（伝習館高校同窓会事務局）

小柳さん（武蔵野音楽大学同窓会事務局）

福岡こども短期大学事務局の方

秋山さん（蕪崎市役所教育課）

本園清高さん（柳川市立蒲池中学校校長。滝田卯夫先生の足跡をご調査頂いた）

田中博先生（附設高校元教諭（国語）、作家）

西原和美先生（附設高校元教諭（国語））

田中真弓先生（附設高校元教諭（保健体育））

町田健先生（附設高校校長、附設高校 23 回生）

郡豊先生（附設高校教諭（数学））

兼行孝幸先生（附設高校教諭（地理）、附設高校合唱部顧問、附設高校 40 回生）

隈正之輔さん（附設高校 1 回生）

古賀暉人さん（附設高校 10 回生、第 4 代同窓会会長）

中村尚昭さん（附設高校 22 回生、附設高校同窓会理事、東京支部回生代表世話人）

古田司さん（附設高校 22 回生、古田哲先生のご末弟）

古田斗志也さん（附設高校 22 回生、古田哲先生のご長男）

古賀善彦さん（附設高校 23 回生、同窓会副会長）

附設高校合唱部のみなさま（初代校歌を 70 年振りに演奏、田村徹先生編曲の混声三部の校歌を初演）

中村昌子さん（附設高校同窓会事務局）

松本義久君（附設高校 37 回生、東京工業大学准教授）

永江雅和君（附設高校 37 回生、専修大学教授）

芝田晃一君（附設高校 37 回生、株式会社パソナテック勤務、旧姓：森田）

田邊晴康君（附設高校 37 回生、PwC あらた有限責任監査法人福岡事務所長）

上記以外の附設高校 37 回生幹事団のみなさん

(惣福協均君、一木孝之君、内田浩史君、大橋俊介君、小多康顕君、柿原晋君、河野吉昭君、柴田真宏君、進藤裕二郎君、中尾哲也君、中山真君、野口隆浩君、林大介君、平岡敏洋君、藤崎親君、洞幸司君、江口豊明君、久保哲朗君)

近藤正一さん(筆者の伯母の夫、伝習館高校出身、今村京子さんの弟、福岡県柳川市在住)

近藤澄江さん(筆者の伯母、筆者の母の姉、旧姓：田中、福岡県柳川市在住)

田中浩一さん(筆者の叔父、久留米大学医学部時代に丸山豊氏のご子息・泉氏(附設16回生)と同窓)

丸山幸男(筆者の父、福岡県筑紫野市在住。戦中・戦後、疎開先の篠栗で藪文人先生の甥、藪正明氏と面識があったとのこと(藪正明氏が中学・高校の1年先輩にあたる))

丸山淑子(筆者の母、福岡県筑紫野市在住、野尻絹乃さんは知人、近藤澄江さんは実姉、旧姓：田中)

丸山知子(筆者の妻、元宮崎コルポロイントプラパ ートリーダー、旧姓：木澤、現在も複数の合唱団に所属)

丸山拓記(筆者の長男、九州大学芸工学部音響設計学科在学中。九州大学混声合唱団所属。作曲が趣味)

丸山奈月(筆者の長女、高校三年生、合唱好きな吹奏楽部員)

< 筆者略歴 >

丸山剛弘(まるやまたけひろ)

昭和46年(1971)3月生まれ。筑紫野市桜台出身。中学15回生、高校37回生。中高はサッカー部。平成元年(1989)4月、東京大学文科二類入学。音楽の素養ゼロで東京大学白ばら会合唱団に入団し、マネージャー(団長)を務める。藤本隆宏ゼミ1期生。平成5年(1993)3月、東京大学経済学部卒業。同年、住友海上火災保険株式会社(現・三井住友海上火災保険株式会社)入社。営業、通産省出向、商品開発、事務プロセス開発部門等を経て、平成24年(2012)より人事部。現在、人事部部長として、人事制度改定を主に担当。社会保険労務士会会員(千代田支部)。令和元年(2019)10月、久留米大学附設高等学校同窓会東京支部幹事長を36回生の飯沼良介先輩より引き継ぎ、各種同窓会活動に従事中。